

季刊

史料と伊能図

一九九六年夏季号

伊能忠敬

研究

「伊能図探究」継承 第八号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 (学習院大学附属図書館蔵 伊能中図)

学習院大学附属図書館の所蔵する伊能中図の琵琶湖周辺である。

中図であるが、領主名が極細の文字で記入されている。領主名のあ
る中図は他に例がない。同館の伊能中図は文化元年に提出された東
三十三国沿海地図の中図五枚、文化四年に提出された中国・畿内の
中図二枚、ならびに文化六年に提出された四国の中図一枚の計八枚
である。文化元年の中図は一般的には三枚であるが、本図は奥州と
関東・中部がそれぞれ二分割されて五枚となっている。

何故、このような寄せ集めのセットがあるかというと、推測だが、
最終版中図で全面改定するまでは、各測量毎に作成された図を集め
てセットにするしか、方法がなかったからだと思う。伊能測量の評
判を聞き地図を欲した諸侯は多いと思うが、その人達全部が、最終
版まで待っていたとは考えられない。四国測量完了時点で、写しを
所望すれば、このセットが最新のものとなる。領主名は特徴を出し
たのであろう。原図にあったか、模写のとき、追加されたかは分か
らない。

本図は写本で針穴はない。ある時期に中間版の中図から模写され
たと思われる。陸軍文庫にあったものが、学習院大に移った。昨年
十二月、甲南大学の久武教授によりイタリアで発見された中図は本
図と同じ構成で、地名、国名がカナ書きとなっている。

(題字は忠敬の筆跡)

(渡辺)

目次

(表紙写真解説) 目次

随想

伊能図研究と広がり of 輪

齋藤 仁 1

伊能忠敬 Q & A

二つの墓所

伊能忠敬の一步の長さ

伊能 洋 3

史料紹介

伊能忠敬の妻・ミチの手紙

小島 一仁 4

伊能家(世田谷)文書紹介

忠敬と共に列島を測った人々・坂部貞兵衛(一)

安藤由紀子 8

封廻状(シーボルト事件の判決)

伊能 陽子 13

伊能測量の地域史料

挙母城下の大庄屋鈴村家の記録

編集部 16

豊田市の史料について

伊藤 栄子 20

連載 第六次測量日記(二)

佐久間達夫 21

伊能図探究 八

伊能日本図探究会

英国グリニッチ国立海事博物館の見学

26

太鼓谷稲成神社(津和野)蔵 日本地理測量之図

28

トビックス

イタリアにも伊能図があった

渡辺 一郎 31

伊能忠敬記念公園と銅像除幕式

新沢 義博 32

入会案内・投稿規定・編集後記

編集部 33

伊能図研究と広がり of 輪

齋藤 仁

平成七年二月十一日、伊能忠敬生誕二五〇周年記念、生涯学習推進住民大会が、千葉県佐原市で開かれた。伊能敬氏（七代目当主）は、「生涯いきいき青春」のパネラーとして参加される予定であった。ところが前日、奥様からお電話で体調が優れず欠席する由の連絡が入った。それから先生にお会いすることなく、四月七日に逝去された。

先生は、学習院大学の小倉芳彦学長と親友で、そのご紹介でお目にかかる機会を得た。お手紙をするとき必ずご返事を下さる先生であった。武蔵大学の化学研究所をお訪ねした時、私の都合に合わせて遅くまでうす暗い研究室で自ら菓子パンとお茶で接待くださり、お人柄がにじみ出る、もの腰の柔らかい先生であった。伊能忠敬直筆の世界地図を広げ、半円方位盤など測量器具も用意され、感激と喜びで先生のお話を聞いたことを憶えている。その後、首都高速道路公団の広報誌「ネットウェイ」(Netway) 高速湾岸線開通特集号に頼まれ、湾岸の夜明けとして、東京湾を初めて測る伊能忠敬特集を二人で編集した。写真を豊富に入れきれいな仕上りの雑誌が出来た。

私達は小学生の頃から伊能忠敬の名と業績を聞かされてきたが、実際に描かれた地図を見る機会はなかった。小図の一部が教科書に載っていたが、何んの迫力も感じなかった。所がその図が学習院大学図書館に所蔵されている事を知って驚き、まず触れてみたいという心の躍動を覚えた。学習院大学の伊能中図は、北海道南部から中国、四国までの九州を除いた八舗の構成である。何度も開いてみる機会をもち一人楽しんできた。図の完成までの努力をひしひしと感じる手書きのすばらしさであった。この地図は、中図でありながら大図の記載

事項が載っており、測線に沿う町村名とともに、幕府領・大名領・知行所・社寺領など領主名がこまかな細字で記入されている。軸装され、大きな桐箱に入れられて書庫の貴重品コーナーに長く眠っていた。

平成四年、日本国際地図学会で、一般にはなかなか眼に触れる機会のない伊能図を複製・刊行しようという企画が出てきた。資料調査委員会が設けられ、複製の原図の選択にとりかかり、学習院中図も参考にと見に来られた面々が、私の古地図への興味を引き出してくれた古地図学会の方々であった。趣味が高じた古地図の収集・研究家の師橋辰夫氏、国際地図学会の地図史部会の主査 清水靖夫氏、地図教育部会の主査 鶴飼幸雄氏と昔からの指導・助言者である。最終的には、東京国立博物館所蔵図が原図に使用された。内容的には長短あるが、保存の良さ、美しさであったのであろう。複製(武揚堂) 図は作業過程のきめ細かさ、紙質・色刷りなど苦労が十分伝ってくる仕上がりであった。ただ、実際の中図の1/2 (縮尺1:432,000) に縮小したのは残念であった。

忠敬ブームというのも大袈裟であるが、井上ひさしの「四千万歩の男」(講談社)の小説や、今風にいう第二の人生への指針になる人物として取り上げられ、雑誌「歴史街道」(PHP研究)、雑誌「歴史」(日本文芸社)で特集が出された。「伊能忠敬―見事なり、二度の人生」(川村優、東京書店)が発売され、「歴史研究」(人物往来社)は伊能忠敬の謎と題してとりあげ、NHKテレビでも「日本を測った男」を放映した。また、佐原市の伊能忠敬記念館・旧宅(国指定史蹟)を訪れる見学者は年間三万人を越えたという。古い町並みに残る小野川沿いの記念館も昭和六十一年の建設で老朽化したので、対岸に新しい記念館の建設が進められており、平成一〇年の開館を目指している。

佐原市では忠敬二五〇周年の記念事業として先述した生涯学習の大

会以外に「フランスにあった伊能図特別公開」をおこなった。その火つけ役は本会代表の渡辺一郎氏である。伊能図探究に情熱を持っており、趣味から入ったが本業のパソコンソフト会社社長そのので探究に専念して居る。持ち主のイブ・ペイレ氏（フランス国立農業高等専門学校）を訪ねた上で了解をとり、平成七年十一月十七日から三日間のフォーラムを実現させた。これら大会では多くの方々の出会いと人の輪、研究の輪の広がりを感じた。佐原市教育委員会の香取禧良氏・青木司氏、生涯教育大会の折に講演された小島一仁氏、元記念館館長でコソコソと史料を解読された佐久間達夫氏、千葉県史に携わってきた渡辺孝雄氏（県立岬高校）など、古くからの伊能図研究者と交歓できた。この大会で通訳を勤めてくれたドベルグ美那子夫人（フランス国立学術研究所）は、私の以前からの友人で、外国・日本の古地図を研究され、伊能図についても堪能な方で、この大会のために態々来日された。

もう一つ地元の動きとして、平成八年二月十一日、忠敬の生家・九十九里町小関で伊能忠敬記念公園が竣工し、銅像の除幕が行われた。文化人切手の中に伊能忠敬が選ばれ発行されたことも、もり上がりムードの一つである。ここでは、企画に尽力された郷土史家の川村優氏との出会いもあった。一方、東京地学協会でも「伊能図に学ぶ」（仮称）と題し、出版計画が進められている。町田洋（都立大）氏を委員長として石山洋（東海大）・吉田栄夫（立正大）・金窪敏知（日本地図センター）・長岡正利（国土地理院）・清水靖夫（立教高校）の諸氏と小生が編集委員で進めており、かなり分厚い本になりそうである。地学協会員の中で伊能図にかかわる方に西川治先生（東大名誉教授）が居られる。私も指導を戴いた先生で「忠敬の測量足跡、その影響と顕彰」に興味をもたれ、足跡に沿った駅伝競争など発想の楽しい先生である。

伊能忠敬研究会も第一回例会（江戸黒江町から暦局の測量コースの散歩と、清澄庭園で集い）を企画しており、飯田橋の研究会事務所では準備が進んでいる。渡辺氏を中心に古文書をばりばり読んでしまう二人の女性グループ伊能陽子・安藤由紀子両氏がいて、古文書から出てくる面白い事実を次々に教えてくれる。安藤氏は五月に長崎の五島列島を訪れ史料の実証もされた。もう一人、立正大学出たての新人新沢義博君、卒論に伊能図関係を取り上げたが、西川先生の指導で市町村史などの関連記述の収集に努めている。

今後のテーマとしては「伊能忠敬展」を東京で開催する夢を馳せていきたいと思っている。



忠敬直筆の世界地図を広げ説明する故伊能敬氏
「海を渡り世界を実際に見るのが彼の夢だったのでは」の言葉が印象的であった。

伊能忠敬Q&A

二つの墓所

伊能 洋

浅草、源空寺に伊能忠敬の墓があることは意外に知られていない。春秋の彼岸には兄と交替で墓参に行くと言うと、伊能家の墓所は千葉の佐原ではなかったかと不審な顔をされた。まさにその通りで佐原市の真言宗観福寺という古刹が菩提寺であり、忠敬の墓もチャンとある。ただし佐原の墓には遺髪遺爪が収められ、本墓は浄土宗源空寺というのが正しい。

なぜこうなったかという点、そもそもは忠敬の遺言から始まる。忠敬が天文、暦学を志し入門したのが幕府天文方高橋至時で、当時、三十一歳、忠敬よりも十九歳年下であったが、西洋暦法の教示と全国測量への道を開かれたという点で、忠敬の今日を決定づけた恩師となった。忠敬もまたこの年若い師を敬愛し、病弱であった至時が文化元年四十歳で没するや深く悲しみ、後年みずからの死に際しては源空寺の師の傍らに葬ることを遺言したのである。

たまたま数年前、家にある古文書の中からその時の寺の送り状を発見したが、当時は菩提寺の変更は大ごとで、宗派寺格の異なる寺の間でしかも檀家総代を務めた家となれば大変なことだったようだ。大枚の供養料も納めたようである。本人は至極満足して先生とつきぬ話をしているのだろうが、それにしても並々ではない師弟の結びつきがうかがえる。現代では信じられないことであるが、一面うらやましい思いがある。

伊能忠敬の一步の長さ

伊能忠敬作成の地図の凡例に、距離測量には間棹、間縄、鉄鎖、量程車などの測量器具のほかに、「足数」、「脚数」、「歩測」を用いたと記している。第三次測量以降は、例外的に量程車を用いた区間（例えば名古屋城下、金沢城下）はあるが、殆ど鉄鎖またはこれに代わる縄を使用しているが、第一次・第二次測量では、歩測も相当使われた。歩測も馴れると精度が上がるというが、忠敬の一步の歩幅を記念館の資料から求めてみた。雑録のなかに、歴局から千住までの距離として、つぎのような数字がある。

木車 一里十二町五一間 (享和二年測量)

歩間 一里十五町五六間 (寛政十二年測量)

(一町に一五八歩)

銅車 一里十五町五八間 (享和元年測量)

木車は量程車のような気がするが、その試作品かも知れない。それと、歩測結果および銅車による測定を対比しているが、ここに書いてある一町に一五八歩を忠敬の歩数として計算する。

一尺は折衷尺の、三〇、三〇三厘とし、一間は六尺、一町は六〇間として、三六〇倍し、一五八歩で割ると一步は六九厘となる。

しかし、実際に六九厘を床に書いて、足を当ててみると広すぎる感じがする。忠敬は身長が高かったのだろうか。忠敬の着物の背丈が一三五厘であるから、肖像画を参考に、顔の長さを加えて一六〇厘前後と推定される。歩幅を、計量史研究(三巻一号、一九八一)にある自然歩行における歩幅の統計でみると、男年齢五〇から五九才の場合、六三、八厘(被検数二八名)となっている。この辺りの数値は、第一回例会の歩行データで検証したいと考えている。

(編集部)

伊能忠敬の妻・ミチの手紙

小島 一仁

伊能忠敬の妻ミチは、一七四一年（寛保元）下総国香取郡佐原村（現千葉県佐原市）の名門・伊能家の九代目長由・タミ夫妻の子として生れた。正確には、伊能三郎右衛門家というべきであろうが、わずらわしいので、ただ伊能家と記すことにする。またミチの名は伊能家の「家牒」には「達」と記されているが、これも、やさしくミチと書くことにする。

成長時代のミチは、決して、幸せであったとはいえないであろう。生れて一年たつたかないうちに父に死なれた。それがもとで、幼児のころから母のタミと共に、タミの実家である香取郡南中村（現香取郡多古町）の平山家にあずけられて、一〇年余りをそこで暮した。一三歳のとき、伊能家のあとをつぐために佐原に帰り、翌年、親戚から躰を迎えた。だが、その躰は、まだ正式に家督を継がぬうち、二年後に病死した。ミチは、その後男児を生んだ。ミチは、十六歳で子持ちの未亡人になってしまったのである。

親戚の人々は、再び、ミチの躰さがしに奔

走した。その結果、ようやく、ミチが二一歳になったときに縁談がまとまった。相手は、上総国武射郡小堤村の神保家の三治郎という十七歳の青年であった。

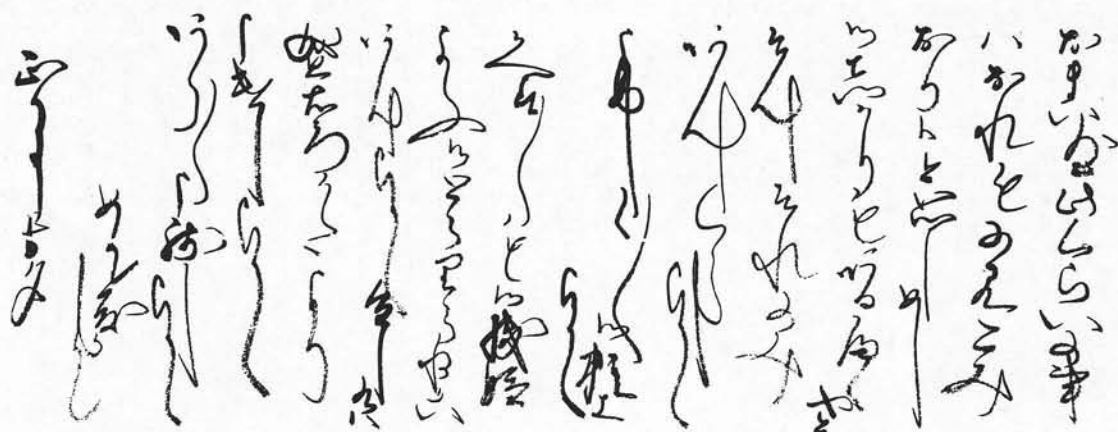
三治郎は、一七六二年（宝暦一二）一二月に伊能家に入り、その十代目の主人となった。これが伊能忠敬である。

ミチが忠敬を夫に迎えた翌年、先夫との間に生れた男児が六歳で病死した。そのとき、忠敬は、自分の親戚筋から、同じ年かっこうの盛右衛門という子を迎えてきて養子にした。ミチの悲しみをやわらげるためであったといわれている。ミチは、その年に長女イネを生んだ。三年後には長男鏡之介（景敬）を、さらに二年後には、二女シノを生んだ。

忠敬の努力と商才によって、酒造などの家業は繁栄し、資産も増した。子どもたちは順調に成長し、やがて、盛右衛門にイネをめあわせて、江戸の出店をまかせられるようになった。そして、ミチは、三七才のとき、忠敬に伴われて奥州松島に観光の旅をすることがで

きた。ミチは、忠敬を夫に迎えることによって、はじめて家庭生活の幸せを味わうことができたのではないかと思われる。だが、その幸せも長くは続かなかった。松島旅行の五年後一七八三年（天明三）、ミチは四二歳で病死した。後に忠敬が全国測量の偉業を達成するなどとは夢にも思わずに世を去ったのである。さて、ミチの人物については、伊能家に伝えられている「旌門金鏡類録」という記録には、「母へ至孝貞節ニシテ能家事ヲ輔ケリ」「恒ニ親戚家人出入マテ実ヲ以テ恵ミシ故衆人ノ心ヲ得タリ」などと記されている。だがそれとあらはらに、ミチは大へんな悪妻であったという伝説も流布している。大谷亮吉氏の名著『伊能忠敬』にも記されているのでその文章によって紹介してみよう。

伝へて曰く、忠敬初め伊能家の小僕たりしか先主人その才を愛し入れて嗣となし配するにその女を以てす、然るに女性狂猥動もすれば忠敬を蔑視し不遜の態度あり、嘗て忠敬と食を共にするに際し女会意に満たさる所あり、則ち沸然として曰く、足下は夫の礼を以て待つべきの人にあらす須く厨下に退きて婢僕と共に食すべしと、忠敬少しも怒れる気色なく従容自若として座を退きたりと。（ふりがなは筆者）



忠敬は少年のころ伊能家の召使いであったが、先代主人に気に入られてあつぎとなり、その娘を妻とした。ところが、妻は気位が高く、忠敬をさげすんで高慢な態度をとることがよくあった。あるとき、忠敬と一緒に食事をしようとしたが、何が気に入らなかつたのか、顔色を変えて「あなたは、私が夫として仕えるような人ではない。台所へ行って、召使いたちと一緒に食べなさい」と言った。そのとき忠敬は、少しも怒った様子を見せず、^{しやうじやく}「従容自若として」(ゆつたりとして、ふだんと変らぬ態度で)座を立った——というのである。

大谷氏は、この伝説について、まず、忠敬が伊能家の「小僕」であつたというのは事実^{じじつ}に反しており、それだけでも「この伝説の根拠すこぶる薄弱」と述べ、「蓋しこの伝説たるもと忠敬の度量大にして小事に拘泥せざりし事を示さんか為め誇張附会せられたるに過ぎず」と指摘している。だが、残念ながら、大谷氏は、ミチがどんな女性であつたのか、その実像に迫るには至らなかつた。

ところが、幸いにも、一九八〇年代に入つて、伊能家の土蔵の解体修理が行われた際、ミチの自筆の手紙が「発見」されたのである。ミチの手紙は、出府中の忠敬に宛てたものが九通(うち一通は宛名書きなし)、養子の盛右衛門に宛てたものが一通、全部で一〇通あ

る。その中の忠敬宛のもの一通を、次に紹介しよう。

- 1 一筆しめしまいらせ候
- 2 此間は道中つゝ
- 3 かなく御つき遊
- 4 され候や、御ようす
- 5 承り度そんしまいらせ候
- 6 事に風はけしく
- 7 御座候まゝさそく
- 8 御なんき遊され
- 9 候ハんと申しくらしまいらせ候
- 10 此方ミなくきけん
- 11 よくくらしまいらせ候
- 12 まゝ御あんし下され
- 13 ましく候、さ候へは
- 14 今日わさく飛きやく遣し
- 15 まいらせ候右のわけは
- 16 盛右衛門かたより
- 17 申遣しまいらせ候
- 18 永沢氏事の外
- 19 のほり御いそぎ、事
- 20 に御けん上のます
- 21 なとも九日に飛きやくニて
- 22 遣しまいらせ候、かれこれ
- 23 承り候はとおまい様の
- 24 事御ゆたんも御座ある
- 25 ましくと存候へとも

26 しかしなから明十一日
 27 田古御礼遊ハし候へは
 28 御くたひれも御座ある
 29 へくとそんし、ひから
 30 御のへ候へは又々永沢
 31 氏ニさきかけいたされ
 32 候てわ御やしきのほう
 33 のしゆひもあんし
 34 られ、事に此方にて
 35 も七左衛門なと、そう
 36 たんいたしまいらせ候
 37 所これもおほか
 38 なくそんし、たとへ御
 39 しかり御座候とも
 40 飛きやく遣し候が
 41 宜しく候と申まいらせ候
 42 まゝ、なへくニて
 43 遣しまいらせ候、かも
 44 おもてむきハ永沢氏へはかり
 45 たのみまいらせ候て
 46 御けん上の分一すかいは飛
 47 きやくのものニ遣しまいらせ候
 48 まゝ、御うけとり下され可候
 49 こんとの飛きやく事
 50 九日夕より今日一日
 51 いろくそなたん
 52 いたし、夕へも八つ
 53 すき迄いろくそう
 54 たんいたし、今日も
 55 朝より遣ハそうか
 56 遣ハすまいかというく
 57 きをもそうたん
 58 いたし候へは、みなく
 59 申候ニハ飛きやく遣し
 60 候か宜しかるへくと
 61 申候まゝ、かならずく
 62 ためなる飛きやくと思し
 63 めし候とも此たひ
 64 ハかえすくも御しかり
 65 候事は御無用に
 66 御座候、ミなくよめ
 67 もねつニそうたん
 68 いたし候も、ミな
 69 おまい様もしゆよく
 70 いたし申たきのみ
 71 ニて飛きやく遣し
 72 候へは、もしも
 73 おまい様此くらしい事
 74 ハおれものみこみ
 75 おり候と思しめし
 76 御しかりもあるへくやと
 77 そんし、そのみ
 78 あんしくらしまいらせ候
 79 よろしく御頼上まいらせ候
 80 かへすくも御機嫌
 81 よふ御とうりうねかい

82 あけまいらせ候、くわしくハ
 83 盛右衛門かたより
 84 申遣しまいらせ候
 85 あらく申残しまいらせ候
 86 めて度かしこ
 87 正月十日夕
 88 みちより
 89 伊能三郎右衛門様
 人々申給へ

右の手紙は、改行まで含めて原文のままであるが、かなりの長文であるので、行間に記された追伸の部分は省略させていただいた。各行の頭にある数字は、説明の便宜のためにつけたものである。

この手紙は、内容から推測すると、ミチが忠敬と共に奥州に旅行し、佐原村が、幕府直轄領から旗本津田氏の知行所となった一七七八年（安永七）以後、忠敬が佐原村本宿組名主となる一七八一年（天明元）以前、ミチ三八、九歳、忠敬三四、五歳ごろのものと思われる。正月に忠敬が出府した後、飛脚に託して出した忠敬宛の手紙である。

13行目までは前置きの文であるが、この部分を読んだだけでも悪妻のような感じは受けない。読みすすむにつれて、ミチの素顔が次第にはっきりしてくる。

16行目、「盛右衛門」は江戸の出店をまか

せていた養子の盛右衛門。18行目「永沢氏」は、佐原村で伊能家と並ぶ名門・永沢治郎右衛門家のこと。20行目、「御けん上のます」は「御献上の鱒」、このころ利根川の網代場では鮭や鱒がたくさん捕れた。27行目、「田古」は佐原南方の多古藩の江戸屋敷のことであろう。29行目、「ひから」は「日柄」。32行目、「御やしき」は「御屋敷」で、佐原村の地頭所津田家のこと。35行目、「七左衛門」は親戚の伊能七左衛門。42行目「なへく」は「内々」。43行目、「かも」は「鴨」。46行目、「一すがい」は「ひとつがい」。69行目、「しゅよく」は「首尾よく」ではないかと思われる。

14行目以降に要件が記されているが、それを簡単にまとめれば、「おつかれのことでしょうが、永沢氏に先を越されぬように、早くお屋敷(地頭所津田家)へ年礼に行つて下さい」という夫への頼みである。

永沢家と伊能家は、佐原では、古くから並び立つ名家として知られ、「両家」といわれていた。「両家」は互いに婚姻関係で結ばれていて、一面では親しいつきあいを続けていたが、他面では、名声を競い合う対抗関係にもあった。だが、忠敬が伊能家に入ったところは、永沢家の方が威勢がよかった。前述したように、伊能家では不幸が続いて、長い間当主が定まらぬような状態であったのに対して、

永沢家の方は窮民救済の功績を認められて、幕府から正式に苗字・帯刀を許されていた。それだけに、忠敬が伊能家の新当主になったとき、伊能一族の忠敬に対する期待は大きかった。ことに、ミチは、夫の名誉と家の名声のために心をくだいていたのであろう。ミチは忠敬が出府した直後に、永沢家が、「御けん上のます」を飛脚で江戸に送り、地頭所への年礼を急いでいるのを知り、「永沢氏ニさきかけいたされ候てわ、御やしきのほうのしゅひもあんしられ」と心配し、忠敬に早く年礼に行くようにとすすめ、同時に、永沢家の「ます」に対抗して、「御けん上」の「かも」一つがいを江戸へ届けたのである。ミチは、なかなか、しっかり者の女房だったようである。

しかし、この手紙で、私が最も心を引かれるのは、ミチが飛脚を出すにあたって、親戚の者とも相談し、「遣ハそうか遣ハすまいか」とさんざん迷った末、ようやく、「たとへ御しかり御座候とも」、出すべきだと決心し、さらに「かならずくためなる飛脚と思しめし候とも、此たひハかへすくも御しかり候事は御無用に御座候」「もしもおまい様此くらいのことハおれものみこみおり候と思しめし、御しかりあるへくやとそんし、そのみあんしくらしまいらせ候」などと書いていることである。この手紙は正月十日付である

が、ミチは、次の正月二十日付の手紙でも、「此事御かへりせつも、かならずくミナくのおり候ところニては御咄御しかりも御めん遊され下され可候」と記している。ミチは、夫から差し出口を叱られはせぬかと心配し、まわりからは、出しゃばり女房と見られるのを恐れるような心根の持主だったのである。

なお、この手紙は、ミチの素顔を浮かび上らせているだけでなく、はからずも、忠敬の性格の一面を示している点でも興味深い。ミチが「御しかり」について、くりかえし書いているのは、裏を返せば、忠敬が、しばしばミチを叱りつけたことがあったということであらう。

この手紙は、ミチが伝説のような悪妻ではなかったことを示していると同時に、忠敬が妻の不礼な振舞いに対して、決して、「少しも怒れる気色なく、従容自若」の態度をとれるような「偉人」ではなかったことを物語っているのである。

最後に、ミチの美しい筆跡を鑑賞して欲しいと思う。

(こじま かずひと・佐原市史編纂委員長)



忠敬と共に列島を測った人々 安藤由紀子

全十回、十七年間に及ぶ測量で、名前の分らない小者をのぞいて二十六名の人々が、この難事業に携わった。平均すると、一人二回半になる。病人はたびたび出たが、重病で帰された者数名、死者は一名だった。小者を入れれば、総数は六十人を越えるだろう。

忠敬は、どんな基準で、隊員を選んだのだろうか。文化元年（一八〇四）、彼が幕吏に登用され、全額公費による測量（第五次）が始まったからの隊員の構成と、人選の舞台裏を、見てみよう。

一、幕府天文方から派遣された人々

この人々は、天文方高橋景保カキヤスの部下であるが、景保の独断で決められ、忠敬に押し付けられたわけではない。高橋景保と伊能忠敬の間には、興味深い点がいくつか見出せるが、ここでは、簡単に触れておく。

高橋景保は、父至時の死後（文化元年一月）天文方に任ぜられたが、この時十九才、すでに暦算に通じ、蘭語を自分のものにしていたという。俸禄百俵の外に、足扶持、役扶持を支給され、後に御書物奉行も兼任した。一方忠敬は、おなじ文化元年、八ヶ月おくれて、幕吏に登用され、小普請組、十人扶持、下総佐原村百姓出身であった。高橋景保の手付の一人に過ぎない。二人の年齢差は、四十才。祖父と孫といったところだ。まだ二十代の青年であった景保が、文化年間の測量のすべての指揮をとったことになる。

しかし、景保が天文学から言語学までの絢爛たる才に、いかに恵まれていたとはいえ、遠国測量は、また別の仕事である。重労働、綿密

な計測と記録作業の持続、現地の藩閥関係者・領民との交渉、そして何よりも、隊員の和をはかり、統率する力が必要な仕事であった。景保は、下役を推薦はするが、決定はすべて忠敬に任されていた。「この者は、才気乏しく、字も下手であるが、性質は至極柔和ですから、その点お汲み取りの上、使ってみて下さい。才気ある他の下役は、気に入らぬかもしれぬが。」忠敬宛の景保の書簡には、この種の文章が散見される。

かれらは士分であり、一人に付き、旅扶持（一日一人二升宛）、雑用金（一ヶ月金一両宛）、手当金（一日銀一匁五分宛）、別段手当金（一ヶ月金二両三分宛）が支給され、従者を連れていた。

二、伊能忠敬の内弟子

学才と健康は勿論、性格に偏りのない事、字や絵が巧みである事、酒を飲まぬ事、などが、絶対の条件であった。佐原村領主の家老の縁者を、縁故採用したこともあるが、「ドン物だ。」と評しながらも、よく指導し、後にながりの戦力になっている。

内弟子同士、新参者の面倒をよくみ、助け合って育てて行ったようだ。後に、天文方に採用された者もいる。かれらに支給されたのは、手当金（一ヶ月金二両三分宛）のみで、下役たちとたいぶ開きがある。有能な者もいたから、このあたりが、忠敬の気の配り所だったろう。

三、小者たち

小者たちには、竿取りをしたり、間縄を引いたり、測器を据え置いたり、現場の下働きをした者たちと、忠敬をはじめ、下役や内弟子の身の回りの世話をした者たち、の二種類がいた。この人たちは、佐原村を中心に、近在から縁を頼って集められたらしい。世話係りでも、のみ込みのはやい人には、測量もさせていたようだ。

かれらに幕府から手当が支給された記録はないから、それぞれの主

人や忠敬が払ったのだろう。因みに、忠敬に幕府が支払ったのは、旅扶持(一日五升宛)、雑用金(一ヶ月金三兩二歩宛)、宿代(一ヶ月銀一枚:四十三匁宛)、別段手当金(一日銀十四匁)であった。

このような様々の人達を十数名引き連れて、最長九百十三日に及ぶ難事業を、何回か成し遂げたのだから、人の管理の難しさが思いやられる。

忠敬はいろいろな事情から、九州の一次測量を途中で切り上げ、いったん帰府した。わずか六ヶ月の在府中に、二次測量の為の人選びをした様子のわかる長女宛の面白い手紙がある。「字を書かせてみて上手でなければ、江戸へ寄越すに及ばない。」「四十すぎでは、年をとり過ぎてゐる。巨細な地図の書き入れ、朱引き、又岩石を歩行したり等に、差し支える。」「手跡下手でなく、酒を飲まず、人品も宜しく、年少であれば良しとする。」などと、書き送っている。身内宛の遠慮ない愚痴でもあろうが、使って見てからは、「ドン物」「間抜け」等と相当手厳しいが、しばらくして、「慣れて来て、仕事をうまくこなすようになった。」「との報告があるので、読む方もホッとす。超人忠敬の目から見れば、大概の人は、「ドン物」や「間抜け」になってしまいうのだろう。

その彼から褒められ、頼りにされた隊員が二人いた。下役の坂部貞兵衛と、内弟子の箱田良助である。先ず、坂部の書簡を紹介したい。

坂部貞兵衛の書簡

未公表の世田谷保管文書のなかで、最も印象深い書簡群である。現場の苦心が直接、読者に伝わってくる。

坂部惟道、通称貞兵衛は、幕府御先手組同心で、古川謙の門に入って数学をまなび、暦局に出役した。始め景保の手付下役、後に手付手

伝に進んだ。文化二年から十年までの八年間(第五次〜八次の四回の測量)、連続して忠敬と行を共にし、彼の測量事業にとって欠くことのできない人物となった。測量術、統率力ともに群を抜いていた。二手に分かれて測量するのが普通で、一方の隊の隊長として、本隊と連絡を取り合い、時には忠敬を励まし、諫めることもあった。文化十年の暑い盛りに発病、七月十五日、五島列島福江島で客死した。

忠敬は、すっかり気落ちしてしまい、佐原の妙薫(長女)へ次のように書き送っている。「ご存じの通り測量については、ずっと羽翼であったので、鳥が翼を失ったようなもの、大いに力を落とし、悲しんでいます。これも天命、致し方ありません。十六日に届けを出し、それから初七日の間に法事も営み、墓碑も相応に造り・・・」

内弟子達が、世話役だった妙薫に宛てた手紙によれば、この後の島々測量中、忠敬はずっと元気がなく、みんなでいたわり励まし、約一ヶ月後九州本土に上陸して、やっと元通りに、かれらを叱るようになっていたという。諦めが早く、くよくよしない人なので、その哀しみの深さがよくわかる。

坂部貞兵衛の書簡は、十三通残されていて、次の六月二十六日付の書簡は、生前、坂部貞兵衛が忠敬に出した最後の、死の十八日前のものである。

文化十年五月二十一日、対馬測量を終わって出帆した測量隊二行は、翌々日から五島列島に取り掛かり、北から測り始めた。一ヶ月が過ぎた六月二十日、伊能隊は奈留島へ、坂部隊は日島へと分かれた。両隊とも六日かかって受け持ちの島を測り終え、明日は久賀島で合流するはずの前の晩である。

実のところ坂部は、日島に着いて間もなく発病していた。忠敬の天文方への報告から推察すると、腸チフスらしいという。しかし、これ

以前の書簡に、「足痛をこらえ、不承々々の小者たちを、騙し々々」とか、「私も、難所の巖石を飛び渡りも出来兼ね、老い込み………」とあるので、疲労も極限にきていたと思われる。

史料 一

B 二一四 坂部貞兵衛書簡 伊能忠敬宛「文化十年六月二十六日」

今朝御認之御状、昼後相達、拝見仕候得共、

今日之出来数、不相知候ニ付、引取迄見合候処、

黄昏、漸々引取、今日迄ニて若松嶋相済、

最早、有福嶋外目二十町程^{黒所}、相ノ嶋

十町程相残り申候。右之分、明朝相廻り、

夫より久賀へ、引移候積リニ御座候。其

御手ニても、今日迄ニ奈留嶋御済、明日は

久賀へ御移り之御積り、被仰下、承知仕候。

右始メ場所、何と申所ニ可有之哉。是迄

奈留嶋より町見□□も可有之、大体

尾形、相心得居可申候得共、跡より御書付

永井方迄、案内役人持参之様、御申談

可被下候。

一、其御方様御不快、少々御快候得共、御床を

御離レと申ニも無之由、御保養專一ニ奉存候。

私義も、兎角はかく敷無之、依之明日は、

日之嶋引払、福江へ相越、転業可仕と

奉存候。日之嶋ニても、大既一廻り程の服業ニ

候得共、庸医ニて不信仰故カ、一向しるし

見へ不申、其上、日之嶋之宿、大家ニハ

候得共、古家ニて、先日之大雨ニ座敷中

もり、寝所ニまよひ、両便所十四五間も

離レ、高キ縁シヤット下りて通い、又、

床之廻りを、数万之蟻行道いたし、

漸々日之嶋出立ニ相成候と、先うれ敷

奉存候。依之明日は、外々も久賀泊り

ニ相越候故、私義も早々日之嶋引払、

御先へ福江へ相越、服業仕、市中廻り之

時分ハ、御間ニ逢ひ申度と、心掛罷在候。

一、明日久賀嶋瀬戸より御初メ、是迄之通

右山ニ、東南海面、御廻り候得は、田之浦

御泊りニ相成可申候。兼テ被仰越候本末

論所も、田ノ浦近所之由、御世話ニは

候得共、手並も相知、調度宜敷

奉存候。永井始、其外共、久賀嶋へ相越候

心得ニ御座候。右申上度夜中

乱筆御免可被下候。以上

六月廿六日

貞兵衛

*(注)『本末論所』五島本藩と支藩との間で、境界に紛争のある場所

『貴方様のご不快、少しずつ快方に向かっておいでだが、お床をお離れというほどでもない由、十分静養なさってください。私もはかばかしくなく、明日はここを引き払い、福江へ行って薬を変えてみようと思っております。ここでも、一回り服薬しましたが、医者を用意していないせい、一向に効き目がありません。

そのうえ、この宿は、大きな家ですが、古ぼけていて、先日の大雨に座敷中漏り、どこに寝ればよいかわからないほどでした。便所は十四五間も離れていて、高い縁側をやっと降りて通いました。また、寝床の回りを、数万の蟻がはい回っています。

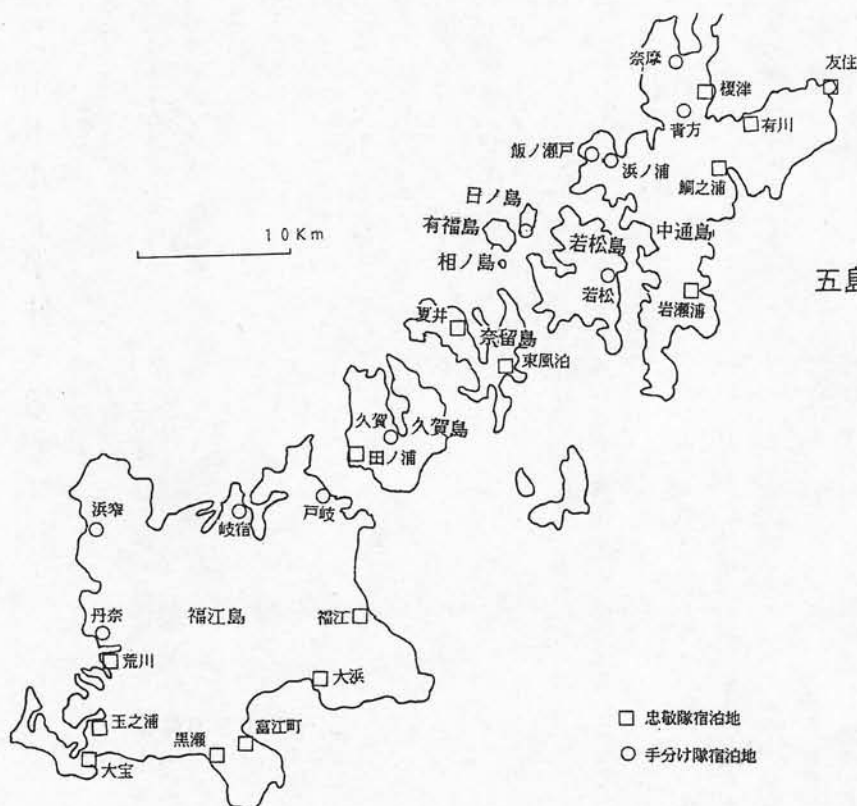
ようやくこの島を出ることが出来ると、まず、嬉しく思っております。明日他の隊員は久賀島どまりになりますので、私は早々この島を引き払い、お先に福江へ行って服薬し、福江のまちをお回りの頃までには回復し、測量の間に合うように心掛けるつもりです。』

翌日彼は隊長を今泉又兵衛にゆずり、治療のため福江に一人直行した。七月十三日福江島を測量中の伊能隊、今泉隊のもとに、坂部危篤の報が、飛脚でとどいた。十四日、忠敬と今泉は、島を横切って枕元へかけつけたが、翌十五日八時半ごろ死去。忠敬は全員を呼び集め、十六日葬儀をおこなった。

二十日迄の四日間、忠敬は、諸届け、法事や墓碑の依頼に忙しく、また「一同集会」し、坂部の所持金、木銭、米代等帳面を改め、書籍も改めた。その間ずっと、雨が降っていた。二十一日やはり雨のなか、測量は再開された。

坂部貞兵衛、享年四十三才。墓は、福江市宗念寺にある。

(あんど う ゆきこ)



五島列島測量関係図

〔追記〕

坂部貞兵衛の書簡は、主なものを何通か紹介し、残りについては、いずれ紙面に余裕のある時、活字を小さくして、全文掲載できれば、と思っている。

なお、これから紹介してゆく書簡の一部は、早稲田大学の社会人講座（エクステンション）「昔の手紙を読む」のテキストとして、柴田光彦先生の指導をうけ、クラス全員で読んだ。松田仙三・佐野登美子・岡本暉子・佐藤ミホ子・小杉敬子・大井淑子・斉藤美栄子・目黒文江・小俣宗靖・井上美津子・北沢文武・甲斐サエ子・青沼方代・安宅峯子・木村弘久・田中球子・四元 仰・松井叶子のみなさんである。

（順不同）

解説部分の引用は、伊能忠敬記念館文書・52「測量日記」22&23（佐久間達夫編）及び84「高橋景保書簡」、千葉県史料・「伊能忠敬書簡」、世田谷伊能家文書・B一五「坂部貞兵衛書簡」、から引いたものである。

シーボルト事件の概要

文政元年 忠敬没

文政四年 弟子達の手によって「大日本沿海輿地全図」完成。孫忠誨より幕府に上呈。

文政六年 シーボルト（ドイツの医者）長崎出島のオランダ商館医師として来日。日本人の治療をしたり、医学教育を行って多くの門人を育成した。蘭学に与えた影響も大きい。

文政十年 忠誨没

文政十一年 シーボルトが、国禁の品々（高橋景保から入手した伊能図や間宮林蔵の「東鞆地方紀行」など）を国外に持ち出そうとしたが、これらを積んだ船が暴風雨のため長崎で座礁。品物は押収される。

文政十二年 シーボルト、幽閉される。幕府御書物奉行兼天文方の景保は捕らえられ、獄中で病死する。（三月二十日）シーボルト国外追放。（十二月三十日）



シーボルトの肖像
（本年発行の切手より）

作左衛門景保は、忠敬にとっては大恩ある師の息子、測量御用の総指揮者、上司である。

シーボルト事件発覚のきっかけを作ったといわれる間宮林蔵は、測量術を教えた弟子という以上に親しく、江戸で一つ屋根の下で暮らしたこともあり、忠誨の教育を頼むほど信頼していた間柄であった。（事件の時、佐原の伊能家に対して、地図等大切なものは決して表へ出さぬようにとの、彼の配慮があったことを伝え聞いている。）

（伊能 陽子）

濱町

高四百俵

一通り尋之上

同道人江預ヶ相返ス

御小納戸小普請
寄合太田波之丞
酉四十九

同人次男

一通り尋之上

揚座敷江遺ス

太田吉次郎
同 十七才

太田波之丞家来

木田耕之助

一通り尋之上

同 三十一才

太田波之丞屋敷内

長屋借請罷在候

喜兵衛妻

一通り尋之上

改入牢

右 喜兵衛

三十八才

四十八才

太田波之丞屋敷内

長屋借受罷在候

橋本源蔵

五十八才

浅草寺地中

泉陵院地借

次郎兵衛店

三右衛門娘

とみ事

はま

廿四

松嶋町

次郎右衛門店磯吉方二居候

ゑつ事 たけ

十九才

一通り
尋之上
改入牢

新両替町式丁目

弥八店 栄蔵娘

なか

十五

浅草寺桃性寺門前

七右衛門店定吉妹

きせ事

りよ

廿六

神田永井町嘉七店

鉄五郎妹

みね

十八才

小船町二丁目

仁兵衛店

傳吉妻よし

二十一

下柳原同朋町

太兵衛店次郎兵衛妻

てつ

十八

浅草寺地中

泉陵院地借

次郎兵衛店

三右衛門

四十八

松嶋町

次郎右衛門店磯吉母

つた

五十一

新両替町二丁目

弥八店 栄蔵

四十八

浅草桃林寺門前

七右衛門店

定吉

三十五

神田永井町

嘉七店鉄五郎妻

ぬる

一通り

尋之上

改預ヶ

樽正町卯八店

音八事

藤三郎妻

はる

四十四

一通り

尋之上

改手鎌

新材木町

半兵衛店

伊兵衛

四十三

本郷春木町三丁目

惣兵衛店惣太郎母

その

六十三

浅草法泉寺門前

藤助店丑松母

とめ

六十二

同所阿部川町

権四郎店留五郎母

きよ

六十

右於評定所岩瀬伊与守

筒井伊賀守鈴木九郎右衛門

立合伊与守伊賀守申聞候

八月十九日

以上

この文書を最初に目にしたのは、わが家の古文書整理をして間もない、十年ほど前のことであった。一存命候ハバ死罪の文字が目飛び込んで一瞬息をのんだ。シーボルト事件?あまりにも有名なあの事件が急に身じかに感じられた。

かなり傷みの激しい巻紙の上に、測量日記などで馴染みの名前が連なり、追放・押込・手鎖等の罪名が胸に痛かった。誰が、いつ書き写したのか、どうしてこの反古の山の中に潜んでいたのか。そんな思いも、いつしか薄れて来た頃、二通目の封廻状を見つけた。一通目と同じ筆跡である。かなり慌てて書いた様子が、誤字、書き直し、そして巻紙の張り合わせ方などから察せられる。

処罰された者には十五才の娘から、六十三才の老女(当時の!)までの女性の名もある。江戸切絵図の中に町名を拾ってみると、八丁堀、浅草あたりに集中しているようだ。暦局に、或いは亀島町の地御用所に、炊事や洗濯のため出入りしていた人達なのだろうか。手鎖をかけられたり、牢に入れられた彼女たちは、どんな思いをしたのだろうか。

「シーボルト」の文字はどこにもないのだがなぜか気になり、ずっと頭の隅にこの文書のことが残っていた。それから数年後、私が古文書の勉強に通っている世田谷郷土資料館で、「高橋作左衛門一件落着写」(上野毛村田

中家文書Y21)に出会った。併せて読むと、まさにぴったり。シーボルト事件の判決申し渡しの場合が、鮮やかに浮かんだ。

指導を頂いた同館の池上・武田両先生の御了解を得て参考史料として掲載する。

史料三 高橋作左衛門一件落着之事

筒井伊賀守殿御掛りにて文政十一子年十月廿三日揚座敷入同十三寅年閏三月十三日流罪

御書物奉行

天文方兼帯

高橋作左衛門惣領

天文方見習

高橋小太郎

寅二十五才

右高橋小太郎義、父作左衛門事江戸参府之阿蘭陀人異国之珍書絵図等所持致候趣及承右書類手ニ入和解致差上候は御用ニ可立品と存込諸望之餘り彼之者望随ひ御制禁之儀を乍心付日本并蝦夷地測量之図其外品々相贈右書類貰受候段重キ御国禁冒不届之至り剩役所御入用之筋儀縦私欲は無之候共勝手向入用と打込遺拂候段紛鋪取計誠ニ身持不愼之儀共有之其方儀は何事も不存冒申之候得共作左衛門右駈不届之始末ニも不心付殊ニ身持等之儀は父ニ候共心付異見可申所無其儀畢竟等閑之

心得方不埒至極ニ付父作左衛門存命ニ候得は死罪可被 仰付ものニ付旁遠嶋可申付旨松平和泉守殿依御差図此度三宅島江遠嶋

高橋作左衛門次男

高橋作次郎

寅十九才

右高橋作次郎父作左衛門不届之品有之候付存命ニ候ハバ死罪可被 仰付者ニ候依之遠嶋可申付旨松平和泉守殿依御差図此度三宅嶋江遠嶋

忠敬や忠誨がもし当時生きていたら、どんなに辛い立場であったかと思う。

景保、林蔵、この二人を含めた多くの人間模様は、シーボルト事件の切り口如何で、際限無く変化するものだろう。

獄死した景保の墓は、浅草源空寺に忠敬、至時と並んであるが、三宅島に流された小太郎、作次郎はどんな生涯を送ったのか。封廻状の中、おみねさん、おったさん達はその後どんな人生を歩いたのだろうか。

激動の時代の波のうねりは、水底のこんな小さな砂まで震わせたのか。

シーボルト生誕二百年のいま、一枚の古文書からいろいろな声が、かすかに聞こえてくるような気がする。

(いのう よつこ)

伊能測量の地域史料

挙母城下の大庄屋鈴村家の記録

編集部

伊能測量隊は九州第二次測量の帰途、文化八年三月二六日名古屋から三河を測量し挙母（現在豊田市）に一泊した。二五日は手分け測量で、忠敬隊は上伊保泊まりだったが、坂部隊は挙母領の四郷泊だった。ここにあげる文書は、当初の予定が変更となり、二五日の坂部隊の四郷入り込みに対応する村方の記録である。

本史料は、豊田市郷土資料館が平成四年に開催した「挙母藩内藤家展」の準備のため資料調査中、豊田市常盤町の鈴村嘉朗氏宅で発見された。鈴村家は挙母城下の大庄屋を勤めた家柄である。

鈴村嘉朗氏と豊田市郷土資料館の御好意で掲載させて頂くこととなったもので、公刊は初めてである。釈文は豊田市郷土資料館の原案をもとし、本会の伊藤栄子氏が加筆した。

史料の内容は大別して、伊能隊（直接対象になるのは坂部隊）に対する接遇要領についての郡奉行所の指示と、村方で提供した食事献立、食事を用意するための経費、支援作業

の人足費の内訳からなる。

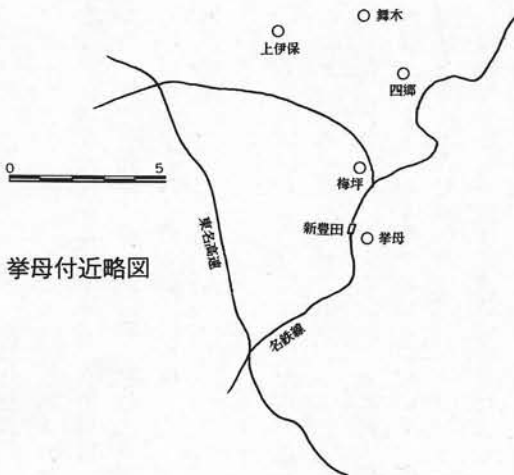
他の地方にもみられるが、ここでは伊能測量隊を巡見使と同じように遇すればよいと考えたようである。扱いは大変丁寧であった。

その一方で、御巡見使の場合経費は藩庁から一部出たらしく、食事の経費、人足費などを、詳しく大きく書き出されている。例えば、坂部隊は五人であるが、お酒を五升四合（二五日夜）とか、二升（二六日昼）とあるが、忠敬は酒飲みは嫌いで、大酒飲みは連れていかない方針だった。各地の史料でお酒のことが出てくるものは少ない。全然飲まなかったとは思わないが、一人夜一升、昼五合というようなことは考えられない。また、材料のなかに献立にないものが含まれたり、醤油は上上醤油、炭は上白炭とお金のかかる書き出しである。また、人足のうち、四郷村分は、本陣掃除、障子張り、料理、給仕人等四八人とあって隣に此の役九六人と二倍に変更している。二倍に増やしているところは道普請、駕籠持ちなどで、人足三百五十一人は二倍したもの

の合計となっている。この人数も平地では、いくらなんでも多すぎると思う。

食事献立以降は経費請求用の積算資料で、実態とは少し違うような気がする。

それはそれとして、前段は藩の指示であるから、相違はない。丁寧に接遇されたことはほんとうである。



文化八年 天文測量方御通行取計向留帳

三月

御通行 梅坪村
御泊 四鄉村
御屋 舞木村
御通行 金谷村
御通行 下林村
御通行 長興寺村
御通行 今村
御通行 古瀬間村
御通行 下津具村
御通行 夏焼村

末三月十九日

尾州犬山表より申来候、天文測量方近日挙母より御出有之、兼々頼置候付申来候、今晚中仙道鶴沼宿泊り之由申来候、右付北町惣右衛門竹生町多兵衛右兩人為聞合犬山へ差遣し候由、右大橋理兵衛より申来候

一右測量之御方、從挙母、枝下村江人馬繼立道筋 從御城下、梅ヶ坪村堤通 荒井村、花本村掛り通行の積り之由 依之右 村々へ早速申遣候様 御代官へ申談候、右之趣御役所申達候

廿二日

一右之御聞合、竹生町多兵衛、罷帰先触承合之趣 大橋理兵衛より申来
一測量之方御道筋替り左之通
一國々測量之為御用、三州挙母より大樹寺通、

岡崎宿迄相測候間、御証文三通、人馬繼立旦通行筋村々より別紙案文之通書付相認指出可被申候并御証文写書、口上案紙相添指遣候、早々順達留り岡崎宿より可被相返候以上
三月廿一日 測量方印

三州挙母より

大樹寺領岡崎迄 村々宿役人中追而此先触書村々ニ而一覽可被致答之處、手間取候而者、通行之指支相成候間、組合大庄屋元其外重立候村々而写取間之村々へ可被致通達候 以上

明後廿三日尾州名古屋出立左之泊順達相越候条得其意、宿甲意可有之候、旦先達而相触候通り書上相認、前泊へ持參可被致候以上
三月廿一日 測量方印

廿三日 平針村

廿四日 挙母之里

追而雨天日送り相成、旦日々手分相成、其外昼休申談候間、前日々村々へ相揃、不遅様罷出可申旨間之村々へ通達可被致候

一測量方、又々御通行道筋替り、左之通り先触来候

上書

御用

先触測量方

一國々測量為御用從、三州挙母、渡刈、矢作、櫻井、米木津通西尾城下迄相測候間、御証文之通、人馬無遅滞繼立旦通行筋村々より

別紙案文之通書付相認 差出可被申候、則御証文写相添差遣候、早々順達 留り西尾より可被相返候 以上

三月廿二日

測量方印

挙母より

渡刈

矢作

櫻井

米木津

西尾迄

右通行筋

村々役人中

追而明後廿三日、挙母泊り夫より岡崎西尾上宿之積り時宜寄手分而、挙母より直一手者西尾相越候儀も可有之候、尤雨天日送之積り前泊書上持參罷出 可被申候、委細其仰可申談候、以上

御證文写

人足壱人、馬六疋、從江戸中仙道、木曾街道筋山城、淀より西国街道赤間関、豊前、豊後、日向、大隅、薩摩、肥後、海邊、廻浦同所島々石見、尾張、三河、甲州街道往還共、測量御用付天文方高橋作左衛門、手附伊能勘解由、同手傳勤方坂部貞兵衛、同下役下河部政五郎、青木勝次郎、永井要助罷越候付、壱人式足勘解由、壱疋宛、貞兵衛、政五郎、勝次郎、要助へ

相渡候者也

文化六^八月

備前印

右村宿中

覚

一人足 七人

一馬 壹疋

一長持 壹棹

右者測量為御用、測器類、從江戸中仙道、

木曾街道筋、山城、淀^ふ西国街道、赤間関、

豊前、豊後、日向、大隅、薩摩、肥後、海邊

廻浦、同所島々石見、尾張、三河、甲州街道

往還共、伊能勘解由、断次第御用中幾度も可

持送者也

巳八月

備前印

右宿村中

伊能勘解由儀、為測量御用、中仙道、木曾

街道道筋、山城、淀^ふ西国街道、赤間関、豊

前、豊後、日向、大隅、薩摩、肥後、海邊

廻浦、同所島々石見、尾張、三州、甲州街道

往還共、於途中も測量可致間、其先々而指

支無之様致、尤地方通行難成処ハ其所^ふ、船

を出し案内無差支様、可致者也

文化六^巳年八月

備前印

村々 年寄共

別紙御案文

半紙堅紙ニ、成丈細字ニ認候事

難讀取郡、村名^者假名付いたし、一部

限りか、一組限り一帳^{シテ}認候而もよし

何之 誰領分

何國 何郡 何村

一高 何千 何石

一家数 何千 何軒

内 何百軒 本村

何拾軒 枝郷何

一村長東西何拾町南北何拾町

一村内往還筋何拾何間

但 何村^ふ

何村境迄

一居村往還通ニ御座候 但駅馬か指馬か

若往還^ふ引込候得者、往還^ふ居村^方角何

程若本村往還^ふ引込枝郷計往還^ニ有之ハ其

訳を認

一当村^ふ隣方角何程

其間 畑か 山越か

一何川、船渡、歩行越何程

一同朱印高

一寺何ヶ寺

一社 何々

何宗 何庵

名所 旧跡何々 名産何々

古城跡、何山誰古城、不分ハ古城と認

遠山見渡方角

右 何村 何々

一今度測量方名前左之通

高橋作左衛門御手附 伊能 勘解由殿

同 弟子 箱田 良助殿

御家来宰領兼 黒田 藤吉

中小姓 松井 沢治

繩役 平助

中間 清七

下河部 政五郎殿

中間 兵助

青木 勝次郎殿

中間 又兵衛

坂部 貞兵衛殿

家来 助八

永井 要助

家来 新助

築田 永藏

上田 文助

繩役 長藏

一測量方休泊違又々御順路、休泊違、御城下御

泊相延候段先触来候由、左之通来候由

則御先触 調役^{トシヘヤク}嘉十郎、庄屋八郎右衛門召

連持参差出候間、一覽之上^{イッパン}上写置左之通

来ル廿六日^{デツケ}挙母泊り、廿七日^{デツケ}日分^ニ一手西

尾泊相成候右途中櫻井村昼休之積り可被致

用意候尤 定之木銭、米代相掛候間、所有

合之品^品手輕可有之候旦雨天日送り相成候、

以上

三月廿三日

測量方 印

休 櫻井

泊 西尾

右役人 中

一三月廿四日、夜中又々道筋替り休泊共左
之通、廻状来ル明廿五日、上伊保泊りの内
手分^一一手ハ四郷泊^二罷越候間、右用

意可有之候 則上伊保四郷と両所止宿
候間、上伊保泊りハ三本木^三昼休之積、
四郷泊り^四上伊保^五昼休致候 休泊用立
可被致候 以上

三月廿四日

測量所

三本木

上伊保

四郷村

右役人中

右之通急^一四郷村御泊 舞木村御昼^二

付差配向委細書付 御代官へ相渡、両村呼出
申談候様、松下圓次郎へ申談

触書左之通

今度天文測量方明廿五日伊保泊り、翌廿六
日猿投^三被罷越舞木村御昼休相成候、右付其
村之御道筋、平除掃道橋繕可致候、百姓農業い
たし候共、かむり物取之可致平伏候道筋之儀
者可成丈農業之儀ハ見合無禮無之様可致候、
村中火之元第一念人可申候

一村境^四村役人兩人、股引^五先立外ニ村役
人之内跡へ下り、一兩人附尋之儀も有之候
得ハ可申達候、休泊有之村ハ御料理品数其
外取計、前宿御城下町方へ聞合念人可申
候

一見歩役一、二ヶ所差出可申候

一伊保村へ御宿亭主之者袴着用村役人差添罷
越諸事相窺御精進日并嫌之品等相伺可申
候 其節御案文之帳差出可申候

一御朱印人馬ハ勿論 其外御入用之人馬無
指支様前宿承合用意可有之候

一人足費無之様村役人差配可致候右之段相
触候間可得其意候委細之議ハ御代官へ相
伺可申候無益之人足遣ひ申間敷候 以上

三月廿四日

孝母 郡奉行役所

梅ヶ坪

四郷村

舞木村

右村々

庄屋

組頭中

百姓代

一元書之通 一手廿五日晚 四郷泊りニ相成
候付村役人 御代官役所へ呼出 左之趣
申聞候様申談

一御本陣 慰斗三方出置候事

一御朱印 被載^一白木三方用意之事

一火之用心第一不寝番御道具兼両三人可
申付候

一給仕料理人^{マツリ}賄方下働等名前書付可 指出 候

一机 二、三脚

一燭台 二、三本

一楓板 二、三枚

一料紙、硯、手水道具

一風呂桶 上下用意之事

一夜具 不残用意尤 木綿^二直事

一蚊屋 不残用意之事

一山駕籠 二、三艇用意之事

一村方火之廻り可申付事

一先來之節^三御荷物案内之者、相定可申候事

一人馬間屋相立、着被致候節罷出平伏可致候
本袴ニて罷出可然候

一御案文之帳面仕立 前夜村江差出可申事

一着被致候節亭主之者 罷出候義承合相勤
可申候右之外得と承合並之通取計万端念
入可申事

一三月廿六日九時過、坂部貞兵衛殿人数四郷
村着被致御用伺として、御代官佐藤五兵衛
差出候處貞兵衛殿被入候 其義御重役中へ
急申達候様被申もの、由、夜中引取申達
四郷村取計左之通

一御本陣 麻上下、脇差^三御迎

四郷村 磯右衛門

一人馬間屋羽をり、袴^三迎同村忠左衛門

一御先拂 郷方 喜兵太 御同心 兩人指遣

先拂杖突人足老人^一持人足老人御同心^二老人

郷方喜兵太

先拂杖突人足老人^一持人足老人御同心^二老人

右村境罷出 御本陣迄御案内

一村境^四御宿磯右衛門方迄道筋間敷改有之

一問屋場^五

郷方 乙助

一翌廿六日朝御出立 猿投江御出、上伊保村
より伊能勘解由殿舞木村^三被出合之積、先
拂郷方喜兵太、御同心圓助、五平治罷出
四郷村^四書遣左之通 (以下次号へ)

豊田市の史料について

伊藤 栄子

以前私は、伊予小松藩会所日誌を、数年にわたって、古文書研究会の仲間と解読した時期があった。その折り、かねて周知の伊能忠敬の測量隊が、小松藩領を通過した時の様子が綴られていて、日誌とは正に生きた歴史なのだと、感動したことを覚えていて、このたび豊田市の「天文測量方御通行取計向留帳」(文化八末年三月)の資料を読み、村方の対応が詳細に記されているので、たいへん興味深く感じた。

まづ、尾州犬山からの触書が、程なく測量隊の来ることを知らせてくると、それを受け、早速犬山へ聞合わせの使を出す。そこで前泊の宿では、どのように準備されたのかの情報を得る。知行所は直ちに行く先々の村へ廻状を出し、その内容が伝達されていく。挙母の郡奉行所が出した、村々への触書を見てみよう。

「今度天文測量方明廿五日伊保泊り、翌廿六日猿投江被罷越舞木村御昼休相成候、右ニ付其村之御道筋平除掃道橋繕可致候、百姓農業いたし候共、かむり物取之可致平伏候、道筋之儀者可成丈農業之儀ハ見合無礼無之様可致候、村中火之元第一念入可申候」

考えてみると、何やら大名行列が通るようであり、忠敬先生にとっては、さぞや不本意のことであつたらう。

また部屋に置く机を初め、硯、手水道具、風呂桶、行灯、燭台、夜具ふとん、食事の献立等々から、出迎えの者や(麻上下)、御宿亭主の服装(羽おり、袴)に至るまで、こまかく指示がなされていた。

伊保村では献立を作るため、忠敬先生の嫌いな物や、御精進日まで、伺うようにとある(江戸時代は、精進日は特に生臭物を外した)次に示すのは四郷村の旧暦三月廿五日の御泊りの献立である。

御夕食

御茶 猪口 大根 皿 ちん皮 浅草のり 御蕎麦
御菓子 おろし 焼味噌 ごま 生が

皿 いか 平 蓮根 大椎茸 御吸物 こち みょうがたけ
めあへ 鯛

御酒 硯蓋 小ぐし 皮たけ かまぼこ
れんこん 花玉子

御夜食

猪口 三つ葉 平 椎茸 なよし(*ぼら) 砂糖餅
したし物 焼とうふ

廿六日 朝

皿 山うど 汁 焼とうふ 小椎茸 干大根 手塩 香の物
白あへ はんぺん 青味 (*手塩皿のこと)

平 干瓢 竹の子 皮たけ 御飯 鯛浜焼
すずき わらび

長芋 ふき

わらび、竹の子、ふき、みょうがたけ等々季節の野菜や、魚はこち、すずき、鯛、ぼら等の、旬の材料を網羅して、当時としては精いっぱい、の御馳走を供していた。

伊能隊の測量模様については、

「右村々惣而道筋間数改、遠近山高サ改、泊村ニ而快晴之夜ハ天文測量被致候由向々申達」とあり、六六才の忠敬先生が測量に励まれたことを、村の記憶は伝えている。

(いとう えいこ)

◇連載 第六次測量日記 (二)

佐久間 達夫

伊丹の昆陽村出立、舞子から淡路渡海、東岸を測り、阿波沿海を経て土佐国界まで。

同二日 晴天。朝六ツ半頃 昆陽村出立。寺本村、山田村(道より左二丁人家)、是迄 川部郡、それより武庫郡になる。西小屋村、鹿茶屋(西小屋村の内)、常松村(武庫川を渡る。水多。昨日は川留のよし)、団ノ子村、同村新田(道より右へ三四丁人家)、上大市村(同断 三丁斗)、下大市村(道断左に)、門斥村 広田村(立場 道の左右に人家、小清水村、(石五六町、土手山の下)、中村(左右共人家)を止て左の堤下に 村あり。(千バ村というよし)、西宮町(小休 即 丑年止宿、それより原川を越て原村あり。打出村(道の左にあり)、小川を渡って打出村(右二丁斗に枝郷 家十軒斗)、芦屋村(人家は 道の左右にあり、又 山根にも見ゆ。去卯九月十七日 大風のよしにて此辺並木松倒る。芦屋川を渡って、又芦屋村須丸太夫の塚ありという。三桑村(人家は右六七丁)、津知村(立場道左右人家、深江村(海辺村 左六七丁)、森村(右山根四五丁)、小路村(森村という山根五六丁、北畑村(右の方 四五丁)、中野村(同)、田辺村(右二丁)、岡本村(田辺の後に当る。右六七丁)、田中村(道の左右に人家あり)、小流を渡って同村(人家は道の左右にあり)、野崎村(山根の人家 道より右六七丁)、横屋村(海辺村 左十町余、魚崎村(同断) 住吉川を渡って住吉町(此所にて中食 夷屋茂左衛門。同所出立左五六町にて御影村なり。右は九丁山根平井村なり。それよ

り右の方石屋村へ四五町 石屋川あり。水なしの河原也。渡って右徳井村へ三四丁、左東明村へ三四丁、それより右山根へ十町斗にして八幡村、即八幡社あり。左の方は走出へ六七町(八幡村の枝郷也。丑測量に八幡村とす)、左 新在家村(丑測量に 右村より前に田村というあり)、河原村(道の左右に人家あり)。後に御門村あり。山根に山田村あり。河原川を渡ても矢張河原村あり。大石村、右森村(二二丁斗)、右鍛冶屋村へ三四丁 味泥村(道の左右人家)、右の方に錦田村(右の方三四丁)、岩屋村(道の左右人家あり)、原田村(右の方五六丁。右脇浜村出在家、左岩屋村五六軒有)。脇浜村(左右に人家)、中尾村(右の方六七丁)、簡井村(右の方三町斗)、中村(右の方山根十町)、板内村(右の方十町斗)、生田村(同断)、左海辺小野新田へ六七町 楠公の碑あり。少し行は船内村、生田村の出在家四五軒あり。生田川を渡って八部郡神戸村になる。二ツ茶屋村、走水村、三ヶ村家続なり。往来の人は悉く神戸と思えり。右の方に宇治野村あり。左は兵庫の出在家なりと兵庫案内の役人いえり。八ツ後に兵庫津へ着。止宿脇本陣明石屋惣左衛門。(上下十六人。一同に止宿) 西宮通行に同所詰大坂町奉行同心須藤牛兵衛、嶋田小兵衛出る。町年寄又左衛門出る。当兵庫津着後、名主爪屋九左衛門、惣代高井喜一、同見習頭並並三郎出る。

同三日 朝曇天。六ツ半頃 兵庫津出立。町外少し行は、右五六町に 村見える。それより右十町余にして長田村あり。左は東尻池村(八九丁斗)、右 池田村(十町斗 長田村へ繞、少し行は、左西尻池村、右西代村(往来右際、それより右は板宿村、大手村(二ヶ村繞て山根十町斗に見ゆ)、それより左駒ヶ林村、野田村(道より七八丁)、それより(右の方四五町に 村あり。須磨入口に天上川あり。東須磨村(立場なり。人家は道の左右)、西須磨村(同断)、一谷、二谷を過、三谷(立場なり。不殘 須磨村の内なり)、それより播州明石郡に成る。塩屋村(道左右人家、東垂水村(中に垂水川あり)、西垂水村(道左右 人家なり)、山田村(出在家)、舞子浜へ四ツ後に着。終日曇天。東風。国界へ明石郷中小役人服部仁右衛門、郡代組小頭岡本善藏待居。其外大庄屋名主各村界へ出て案内。明石大船頭 西海兵太出て淡州渡海見合をいう。又、岡本善藏も渡海に風不宣候に付見合候様をいう。仍て舞子浜止宿。龜屋嘉右衛門。

同四日 朝曇。北風。四ツ後より少晴。明石大船頭、郡代組小頭、淡州渡海の後不宣旨をいう。度々かけ合、漸、九ツ後舞子浜乗船。順風直に淡路の国津名郡岩屋浦へ着。止宿 庄屋宇右衛門。脇宿 海部屋幸十郎。此日四ツ頃、関権次郎、樋富菊郎、岩屋浦より舞子浦止宿まで乗船して来る。仍て淡州へ渡海、並に淡州測量を談す。岩屋浦着後、郡代奉行津田甚之助鎗引馬にて罷越し挨拶。此夜晴天測量。

同五日 朝より晴天。濃氣多して遠山は不見。六ツ半頃岩屋浦出立。(下河辺は地図。先へ飯屋浦へ行、

我等、坂部、柴山、青木、稻生、文助、岩屋浦の止宿より逆に燈明堂迄測り、引返し、又止宿下より初。

楠本村、浦村、來馬村を歴て飯屋浦（旧來馬村の属）まで測止宿。本陣 植野六郎兵衛。脇 正井脇右衛門。

此日中食、楠本村、太右衛門、定平。着後 郡代手代高木津左衛門、石浜久兵衛出る。関權次郎、樋富菊郎、日々付添。（此以後略之。此日より引續手伝、足輕十一人差出す。（伊吉、武助、久郎、幾之助、俊藏、新藏、牛之介、寅之介、富之丞、吉之助、彦藏、合て十一人なり。淡州 阿州兩國不残手伝なり。

同六日 朝より晴天。六ツ半頃 飯屋浦出立。谷村下田村、釜口村、釜口浦、佐野村、中食和右衛門。佐野浦、又佐野村、中之内村、生穂村、大谷村、志筑浜村迄測。止宿 本陣八ッ前着。急頂寺仁三郎（領主座敷あり）。脇 菅平兵衛。（造酒家にて嶋屋という。此日三原郡市村 木田晴庵に對面。（阿州より淡州中付添医師。下河辺病氣に付療治。）

同七日 朝晴天。六ツ半頃 志筑浜村出立。志筑浦（又 志筑浜村、それより塩尾浦、下司村、塩田里村、安手下村（中食 真言宗東山寺、厚浜村、塩田浦を歴て洲本へ八ッ半頃に着。止宿 本陣 鍋屋保野弥。脇宿 鍋屋茂一郎。此夜少晴測量。阿州侯より鹹温氈一箱。五色索繩一箱 寒製給一桶御贈被下。即受納。

同八日 朝曇晴。六ツ半頃 洲本出立。小路谷村、内田村を（中食 五兵衛）歴て由良浦へ九ッ後に着。坂部は手分にて直に由良浦に至り、成山の周囲を測。由良浦、本陣 庄慶門右衛門。脇宿 年寄太右衛門。

此所小磯にて可なりの磯なり。汐干一丈、汐満一丈四五尺、明和二年より 同三戌年、船入を新に堀立しよし。此夜晴天測量。

同九日 朝曇。六ツ半頃 由良浦出立。我等、坂部、柴山、青木（図）、文助、善八、司浦下より初、中津川を過て相川村迄測り四ツ半着。止宿 立田在兵衛（一軒）、稻生、佐助、相川村止宿へ朝より越、地図、又 象限儀を磨。此日中食なし。立田在兵衛 家作広よし。

同十日 朝曇。六ツ半前 相川村出立。同村より測。四ツ頃より晴天。畑田村（是迄津名郡）三原郡來河村、白崎村（旧吉野村、往古は此所に人家あり。当時地先斗、黒岩村、惣川村、吉野村（當時 此所に人家あり）、山本村、城方村、油谷村、弘川村、円実村、土生村迄測。同村より一里沼嶋へ渡海す。八ッ頃沼嶋へ着。止宿 本陣庄屋多田七郎右衛門。脇宿 年寄八兵衛。七ッ頃炎治をす。

同十一日 朝曇。同所逗留。此嶋の周囲を測。朝六ツ半後、手分一手は、我等、下河辺、稻生、善八、同村下より右山に添て測。一手は坂部、柴山、文助、佐助、左山に添て測。無程 雨降出し波高。両手測量不成。四ッ後に帰宿。それより雨止 少晴。八ッ後より又曇る。微雨。七ッ前坂部來て御証文を納。

同十二日 朝大曇天。終日小雨。暮より夜分大雨。同十三日 朝大曇、波浪高測量暫相成逗留。関權次郎進めにより八幡參詣。別當真言宗龍登山神宮寺へ立寄。此寺へ當嶋のメ道路平という者、奇石數百品を持參一覽す。其眞三百品ありという。江州石亭勢州山中甚作に類せし者なり。

同十四日 朝より晴天。風波ありて船測ならず見合居る。山の縁を測量せんと午時頃より手分。一手は我等、下河辺、稻生、十一日測終より初。一手は坂部、柴山、文助。是も同 十一の測終より初、山の神際にて両手合測。両手共難所なり。七ッ後両手一同に帰宿。

同十五日 朝より晴天。六ツ半頃 沼嶋出立。渡海して土生村へ着。去る十日の測量より初、仁頃村、阿方東村地先 阿方西村（字塩江 家五軒）、又阿方東村（中食 百姓兵治郎）、又、西村、塩屋村、吹上村、又塩屋村地先 地藏堂迄測。七ッ後乘船。福良浦へ着。止宿、本陣、庄屋 角藏、脇、庄屋 吉兵衛。

同十六日 朝曇天。六ツ半後 福良浦出立。手分。坂部、柴山、文助止宿下より初。逆に昨日測量地藏堂迄測。それより鳴門岬前より順測して鳴門岬の上まで測。我等、下河辺、稻生止宿下より順に鳴門岬へ向て測。福良浦枝郷鳥取入口にて留、龜印を残し、鳴門岬を一覽し、別手測初の 龜印より逆に鳥取入口の 龜印へ繞き、両手測済、鳥取にて中食し、それより直に乘船小雨あり。八ッ頃出船す。七ッ前阿波國板野郡岡崎村（此辺総曰 無養郷）へ着。止宿 真言宗蓮花寺。脇 同宗法宗寺。船上に郡代手代高井頼左衛門、久保添形兵衛、庄野官平、高岡小三太出る。着後にも出。（是より日々付添。暮に郡方奉行福岡八揆抄あり。

大曇小雨。（無養は郷名にて二十四ヶ村あり。十二ヶ村才田塩を製。無養郷は明神村、黒崎村、斎田村、南浜村、立岩村、井才天村、北浜村、小桑嶋村、大桑嶋村、三ッ石村、高嶋村、小嶋田村、右十二ヶ村は斎田塩を製す。岡崎村、里浦、粟津浦、林崎浦、土

佐泊浦、堂浦、湊谷村、北泊村、大嶋田村、中嶋田村、室村、無佐村、右十二ヶ村は漁獵又農事を専業とす。此日、福良浦持洲崎、弁天嶋、沖刈磯、三嶋共遠測。岡崎村着後無養郷、大庄屋尾居七郎左衛門(即 黒崎村)、同断 綱木庄右衛門(即 明神村)、同断中嶋伊兵衛(即小桑嶋村)、同断別宮浦森当左衛門四人夜に入て出る。

同十七日 前夜より大風雨。同所逗留。郡代手代大庄屋出る。

同十八日 朝曇天。(同所逗留測)六ッ半頃出立。土佐泊浦人家下より初、海を右岡を左になし、嶋門口迄測(即 孫崎)、山上にて中食し、又孫崎より初嶋の杜際まで測る。我等、坂部、柴山、下河辺、青木、佐助、善八測。稻生は地図。

同十九日 曇晴(同所逗留測)朝六ッ半後、我等、柴山、下河辺、青木、稻生、文助、佐助、善八、土佐泊浦人家下より初、左入海、右山に添、三ッ石村迄測。又、土佐泊の地先を測る。又、我等、下河辺、青木、岨越より手分し集明神迄測る。七ッ後帰着。

同二十日 晴天。朝六ッ半前、無養の岡崎村出立。

(下河辺は地図 宮嶋浦へ先行)我等、坂部、柴山、青木、稻生、佐助、同村止宿下定坑より測初、里浦、長原浦、別宮浦測て、七ッ頃宮嶋浦に着。止宿 本陣鈴屋茂三郎(本家は、坂本茂兵衛という。新宅にて隠居の別家の由、一軒は沢口助之丞、郡代手代久保添形兵衛、其外手代案内。大庄屋近藤吉兵衛 宮嶋浦庄屋坂本泉左衛門、長原浦庄屋坂本直兵衛出る。別宮浦の庄屋森当左衛門、小桑嶋庄屋中嶋伊兵衛(兩人は当国の界迄付回り也。出る。森当左衛門中嶋伊兵衛兩人以下不記)此日 粟津川(粟津口という、吉野川の正流

本名広戸口也)、長原川(長原口とも、新川筋ともいう。本名は今切口なり)を渡る。

同二十一日 朝晴。六ッ後 宮嶋浦出立。我等、坂部、柴山、青木、善八、宮嶋、嶋浦、尾村海辺になし。別宮川通にあり。別宮口(吉野川の別流大川ゆえ吉野川という)の川向 名東郡神ノ洲浦初、津田浦を測(津田口あり。勝浦川と吉野川両流、南斎田村にて中食。堤の上を測り、それより乗船、安宅天文台へ立寄。又乗船して九ッ半頃徳嶋城下(松平阿波守居城)着。止宿新魚町 荒井武兵衛(別宿)、東新町中嶋屋四郎兵衛。此日も同様 郡代手代村々庄屋付添。着後、町方役和田斎兵衛、木村祐兵衛出る。止宿中添役也。宮嶋浦止宿 本家坂本茂兵衛見舞来る。南斎田浦大庄屋 武田孝助、神ノ洲浦大庄屋太田斎助出る。当止宿親族。同町玉屋金治郎、西横町木下藤右衛門出る。宮嶋浦庄屋坂本安左衛門来る。八ッ半後より雨。

同二十二日 曇天。又小雨。同所逗留。小桑嶋大庄屋中嶋伊兵衛、別宮浦大庄屋森当左衛門、日々見回に出る。当国中付添なり。此以下は略す。郡代手代高井類左衛門、庄野寛平次、上下にて出る。木村祐兵衛、国主より贈物膳籠紙千枚巻一箱、我等へ被下。鼻紙巻メ宛内弟子 並 侍四人へ、刻煙草三包宛 儀三人へ被下。此夜桑田伊予治出る。荷物差添のよし。当所より江戸幸便に唐局へ書状を出す。

同二十三日 雨天。同所逗留。当国主より被下物数品、福富菊郎相頼江戸南八町堀中屋敷武谷新五右衛門迄相届。

同二十四日 朝より晴天。午中を測。それより当所大滝山持明院の諸堂 並に滝を一覽し、日蓮宗本行寺の自然庭園を見る。それより勢見山観音寺の金毘羅大権現へ立寄帰宿。出立跡にて象限鏡到れ、遊表、遠鏡留の角輪、大に損ず。金具を直し鉢を以て此夜測量南北の差を生ず。

同二十五日 朝晴。六ッ半頃 徳嶋城下出立。津田口迄乗船。即 津田川口より初、竜ノ口を渡り(即 勝浦川)勝浦郡大原浦を過て小松嶋浦海岸迄測る。即 勝浦郡小松嶋浦止宿。本陣 寺沢慶太郎。脇宿 森八左衛門。八ッ前に着。前方松浦又左衛門、桑田伊予治出る。当国中付添という。当小松嶋浦庄屋寿太郎。年寄金右衛門、五入超清右衛門出る。中嶋伊兵衛、森当左衛門、当国中付回付 日々止宿へ出。仍て以下は不記。勝浦郡中田村大庄屋田村間右衛門飯谷村大庄屋竹内柳左衛門、畠野村大庄屋長田宇之丞、傍崎村大庄屋安部竹三郎出る。此夜雨。

同二十六日 朝雨。五ッ後止。逗留。又午前より雨。夜は大曇。

同二十七日 朝曇小晴。六ッ半頃 小松嶋浦出立。同所海岸より初、金磯新田を測。それより那賀郡立江村、和田津新田、和田嶋村(中食 庄屋森頼左衛門、江野嶋村、色ヶ嶋村を歴て今津村迄測て止宿。西本願寺 至心山信行寺(上下十六人止宿)午後より晴る。白雲多し。止宿亭主分石塚村庄屋儀八郎、黒地村庄屋熊太郎(右兩人飯亭主 海付村にあらず。岡村役人也。以下も同)、立江村大庄屋笠原文五郎、坂基村大庄屋森孫太郎、西路見村大庄屋天羽文之助出る。

高井類左衛門、庄野官平日々付添（此以下略之。又書出もあり。）

同二十八日 朝曇天。六ツ半頃 今津村出立。同村海辺より初、芳崎村、刈屋村、工地村、上福井村、中嶋川あり。中嶋浦（又川あり）西路見村を経て中林村迄測。八ツ頃に中林村着。止宿 真言宗 天狗山新福寺。脇宿 百姓助太夫。着後 同村庄屋宅兵衛、五人組 太郎兵衛 与左衛門 藤吉出る。此夜小雨、又大曇。

同二十九日 朝大曇天。六ツ半後 中林村出立。坂部止宿へ先行。答嶋村（中食「久」新浜力太。此村には「久」というて、江戸へ塩漬入の回船持あり。親族合 八軒ありと）橋浦迄測。午前より雨強、途中より測量止て橋浦へ越て止宿。（本陣 庄屋東条政左衛門 脇 真言宗光明寺、答嶋村 大庄屋曹田官左衛門案内又止宿へ出る。

同晦日 昨夜より雨見合（同所逗留測）五ツ後より出立。手分。（即大曇小雨）我等、下河辺、稻生、佐助、関権治差添、橋浦止宿下より逆測。当浦内より答嶋村、昨日測終へ繋ぎ、答嶋村中食、橋上定右衛門。それより長嶋へ渡、螺貝岬より初、鵜渡嶋迄各一周を測る。

八ツ後に帰宿。（此日答嶋村 小休。福田卯之助、坂部、柴山、文助、小勝嶋、高嶋各一周を測、七ツ頃に帰宿。郡代手代高井類左衛門、久保泰形兵衛、跡方松浦又左衛門、桑田伊予治、大庄屋中嶋伊兵衛、森当左衛門、日々付添（是迄も 此後も年落多し）。四月朔日 大曇天。又小雨。（即 橋浦逗留測）

朝六ツ半後手分。我等、下河辺、稻生、佐助、止宿より順測。下福井村字恵金手分の初杭迄測。それより手分の打終の椿地村後戸迄山越横切の測をなし

椿地村にて中食。それより椿地村、椿村界を越、椿地内迄測。乗船して八ツ後に帰宿。坂部、柴山、青木地図、文助、善八、下福井村恵金より初、竜宮崎を回り椿次村の後戸迄測て台測。九ツ後に帰宿。橋浦五人組、藤兵衛、五郎太夫、所左衛門、与治兵衛案内。

同二日 朝晴。五ツ前橋浦出立。手分。我等、下河辺、青木地図、稻生（通富案内、昨日測殘椿地内より初、橋浦浦迄測。坂部、柴山、文助、橋浦より直に乗船橋浦浦持の野々嶋、舞子嶋を測、それより橋浦浦より逆に手分へ出会迄測。両手共七ツ後に橋浦浦止宿着。本陣 真言宗 豊谷山福蔵寺。脇宿 西本願寺派寒江山等覺寺。当浦大庄屋 桑野村 紅露恵市（村界迄案内又止宿へ出る）

同三日 朝曇。（同所逗留）六ツ半頃乗船。三里渡海。五ツ後に伊嶋着。手分測。我等、下河辺、稻生、佐助、村下より右山、即伊嶋に付て測る。坂部、柴山、文助、善八、村下より左山、即 伊嶋に付て測る。両手合測八ツ後に終る。それより乗船 伊嶋へ帰り、同所の向嶋を半測し休息して直に乗船、橋浦浦へ七ツ半に帰宿。此日風波なく海上大に静なり。此夜晴曇。壁間に測。

同四日 朝曇。六ツ半後（同所逗留測）我等、下河辺、柴山、文助、同所止宿下より初、椿村字横尾へ印杭を残し、それより同村字尻杭迄測。此日度々雨。八ツ後中雨又風。岬迄測量ならず。尻杭より乗船して帰宿。（坂部 稻生残居て地図をなす）

同五日 晴天。朝六ツ半橋浦浦出立。手分。東河、下河辺、稻生、青木地図、昨日測留字尻杭より初、椿村の内浦生田を測、同岬を回り椿村の内字橋杭手分の印杭へ合測。坂部、柴山、文助、椿村字尻杭より初、山中を横切椿村の内字橋杭迄測。印杭を残し、それより海部郡伊座利浦地内迄測。両手共七ツ半後に着。止宿 伊座利浦 浜野堅左衛門。脇宿 真言宗海見山極楽寺。此夜晴天。遅刻ゆえ不測。

同六日 朝晴天。海幸絶壁 満汐に測量難成、午前見合居て午前乗船。我等、柴山、稻生、文助、善八、昨日別手測終の伊座利浦地内より初、阿部浦人家下迄測（坂部、下河辺地図、青木病氣、阿部浦止宿 喜多桑嶋之助。脇宿 真言宗 金龍山光明寺。此日午後曇る。熱し胸着を脱。此夜曇少晴。雲間に測。

同七日 朝曇る。（同所逗留測）六ツ半後、東河、坂部、柴山、文助、一手にて当浦より山越横切測量。椿村（石村は山間、左右八九丁にて山際所々に人家あり。惣田地 長一里余、昨日日印杭残置し字横尾へ繋測。それより山越、元ノ道を阿部浦へ八ツ後帰宿す。当浦五人組、幾右衛門、弥五左衛門出る。海部郡頼浦庄屋高橋善兵衛、木岐浦庄屋村上民吉出る。此夜晴天測量。此日 下河辺 稻生地図 青木病氣。

同八日 朝より晴天。阿部浦出立。手分。我等、下河辺、稻生、青木地図、同浦下より初、志和岐浦字塩吹迄測。それより龜野嶋を八九分測。九ツ半後に着。坂部、柴山、文助、志和岐浦字塩次より初、東由岐浦下迄測る。九ツ半頃に着。止宿 東由岐浦、本陣滝悦郎。脇宿 白圭山長円寺。此所より郡代手代 高

薩摩藩出役。此夜晴天測量。

同九日 朝大曇。六ツ半頃 東由岐浦出立。手分、我等、下河辺、青木地図、稻生、東由岐浦止宿下より初、西由岐浦、木岐浦、中食寅言宗神護山真福寺。それより同村字田井(人家四十軒斗)白浜(人家十軒斗)を過て同村字ミゴロまで測、手分と合衆。此日雨度々降出し海荒船測成し難、山峯を越て測、衣服濡て甚苦し。坂部、柴山、文助、木岐浦字ミゴロより初、日和佐浦の内字恵比須浜を測。中食。それより日和佐本浦迄測。八ッ後に着。後手は七ッ後に日和佐浦着。測終て大雨。止宿 本陣 奥河内村、真言宗 松尾山觀音寺、脇宿 五郎四郎。(日和佐浦を本とし、古来属する村、奥河内村、山河内村、西河内村、北河内村なり。仍て四ヶ村共庄屋あり。惠美奈浜は後の枝郷なり。此村庄屋北村兵太夫出る。西由岐浦大庄屋 八田庄左衛門出る。

同日 朝晴天。坂部、柴山、下河辺、青木、文助、善八、一手にて日和佐浦より初、同浦字トノムイ迄測。(但、海村は不測 日和佐浦の枝・恵比須浜は日和佐浦の枝郷。奥河内村は海なし。日和佐浦と軒を並ぶ旧日和佐浦の枝郷也。トノムイより前山は、奥河内村枝トノムイより後は、山河内村枝のよし。西河内、北河内は余程難し村の由、海部郡大井村、大庄屋富田与治右衛門、阿部浦大庄屋 喜多条嶋之助出る。(我等 出子日記を写。稻生地図。)

同十一日 朝大曇。日和佐浦(但 本陣は奥河内村也)出立。六ツ半頃 手分。後手坂部、柴山、青木、文助、善八、日和佐浦字トノムイより初、同浦分字明

丸迄測。先手 我等、下河辺、稻生、佐助、同明丸より初、無程、山上に磯村の界あり。海辺は日和佐浦、牟岐浦の界なり。それより東牟岐浦を過て西牟岐浦止宿下迄測。(海辺 磯村、牟岐浦界は、砂浜続の小嶋ありという)後手は八ッ後 先手は七ッ前に牟岐浦着。止宿 本陣 浄土宗 榮忠山西念寺。脇宿 与左衛門。西由岐浦大庄屋 八田庄左衛門、日和佐浦庄屋 北村兵太夫、牟岐浦庄屋 久佐木銀治郎(東西牟岐 一浦なり)年寄 浜川民蔵、内妻村大庄屋 青山啓右衛門、阿部浦大庄屋 喜多条嶋之助、海部郡大井村大庄屋 富田与治右衛門出る。

同十二日 朝より雨。逗留。当浦年寄 八島勝吉出る。夜亦雨。

同十三日 朝より雨。逗留。終日降る。

同十四日 曇天。微雨。大嶋 出羽嶋手分測量。

舟乗場迄出 雨降出し帰宿。終日曇。又微雨。

同十五日 晩雨。六ツ頃止て曇天見合。五ツ頃乗船。我等、柴山、関樫治差彦、出羽嶋一周を測。それより津嶋へ渡。半周を測。沖小津嶋、地小津嶋遠測して八ツ半頃帰宿。坂部、下河辺、青木地図、稻生、文助、二手分して大嶋一周を測、七ツ頃帰宿。

同十六日 朝晴。又曇る。先手 我等、下河辺、稻生、浅川村枝加嶋一周を測、それより浅川村(印杭を残し)、浅川浦、大星村を過て瀬浦迄測る。後手坂部、柴山、文助、牟岐浦(西牟岐)止宿下より初、内妻村、浅川村(印杭迄)測て先手と合。それより乗船。八ッ前に先手は七ッ後に瀬浦へ着。本陣 浄土宗東林山弘誓寺。飯亭主 中内順左衛門。脇宿 三郎右衛門。着

後瀬津大庄屋 高橋六兵衛、浅川村大庄屋 丸岡紀兵衛、相川村大庄屋 岡崎夫右衛門出る。其外郡代手代 駒方村役人出る。

同十七日 朝晴天。六ツ半頃 瀬浦出立。手分。後手 坂部、柴山、文助、同浦止宿下より穴喰浦の内那佐浦(中食 先手横切の所也。深入し渡、同浦の内乳ノ崎迄半側測る。後手 我等、下河辺、稻生、乳ノ崎より初、同浦の那佐浦を通り、穴喰下迄測。それより仕越に同所より字カナガ崎迄測。前後手共八ッ半頃完穴喰浦へ着。止宿 本陣年寄田井久左衛門。脇宿 大庄屋白々伊之丞也。当所も穴喰浦、穴喰村と相分るといへと、実は穴喰浦なり。穴喰浦大庄屋は、即 百々伊之丞、穴喰村大庄屋 多田本左衛門。(此大庄屋より穴喰村の事を彼是といえなせり)。此夜晴天測量。

同十八日 朝晴天。満汐ゆえ見合。五ツ頃乗船。

我等、柴山、青木地図、稻生、当浦昨日打留カナガ崎より初、阿州海部郡穴喰浦、土州安喜郡甲ノ浦界迄測。外にサビ嶋、四嶋一周を測る。外の嶋々は遠測。坂部、文助、竹嶋一周を測、二子嶋遠測。両手共八ッ頃帰宿。関樫治郎、樋富菊郎初、郡代手代駒方(手代四人 駒方二人)大庄屋中嶋伊兵衛、森当左衛門、其外大庄屋共不残出る。此夜曇る。曇天中測量。(遠測嶋々、シシバへ、アグリ嶋、ウバ嶋、タナバへ、スズ嶋)。

伊能図探究 第八号

伊能日本図探究会 渡辺 一郎

伊能図見て歩き (二)

英国グリニッチ国立海事博物館の見学

昨年、イギリスの伊能小図を自費出版したが、現物をまだ見ていないことと、複製がどのくらい本物に近いかを、見ておきたいと思って、一九九五年十二月に英国のテムズ川の下流にあるグリニッチの国立海事博物館を訪問した。最終版伊能小図の揃いは此処にしか存在が知られていないものだ。

これまで、何回か手紙のやりとりをしているので、まず、ピクチャライブラリーのマネージャーに対して見学申し込みの手紙を送ったところ、ビジュアルアクセスという担当の女性から正式な用紙で申し込むように、今ならこの日が空いている、と案内があった。

ファックスでよいとのことなので、記入して送り返す。すぐ、返信があり、学芸員と一緒にイーストウイングの入り口でまっているから、十四時五分前になるようにといってくる。早速了解を送ろうとして、伊能小図をもとに作成した英国の当時の海図も見せて貰うことを思いだし、追加希望を申し出た。これもすぐ了解されて、随分物分りがよい感じであった。

十二月六日(火)の予約なので、三日(土)のANAに乗る。送迎が付いていたのでホテルまで運んで貰う。翌日市内観光半日、ウインザー半日、四回目のロンドン歩く。五日は個人移動のトレッキングで鉄

道利用でカンタベリーにゆく。空いていて綺麗で快適だった。

六日、海事博物館訪問日である。前回に予約なしで行って門前払いを食っているので、行き方は知っている。ロンドン橋からテムズ川をボートで下ってゆくのが最適だが、冬なので鉄道を使うこととし、約束時間の二時間前に、ピクトリア駅につく。

ところが雪のため電車は分らないという。これには参った。仕方がないので、タクシーをつかまえる。グリニッチの国立海事博物館にゆくか、と聞いたらゆくとのこと、幾らだ、二十ポンドはかかるまい、で車上の人になったが、今度は大渋滞で全然進まない。また、ロンドンのタクシー運転手は道をよく知っているというが、地図など出して見ていて、心細いこと夥しい。



図1 英国グリニッチ国立海事博物館全景

やっとグリニッチについて、やれやれ。博物館の前を通っているで、ここでもいい、というのにどんどん行ってしまふ。イーストウイング(私は此の場所を知らない)へ連れて行けと頼んだので、場所が違うのかと思っていたら、隣のダートマスの海軍兵学校へ行って、歩いている海軍士官に聞いていた始末。それなら私のほうが良く知っているようなもの。ロンドンの運転手も当てにならないのがいる。料金は一時間近く乗って十七ポンドだから安かった。

三十分前に受付について、ソファで待っていると、先方から用を聞きにくる。待っていることを連絡して貰って、博物館のカフェテリアに食事にゆく。

約束時間になったら、担当のコンスタンチニイが出てきて、車に乗れという。他の五人組とワゴンに乗せられる。何処へ連れてゆかれるのかと思っていたら、十五分くらい乗って平屋の倉庫につく。ここで、五人組と分かれて学芸員のタイニイに紹介された。女性の助手をつれた中年の男性だった。海図と地図の担当という。まず、海図を見せて貰う。原寸のコピーが欲しいというと、料金を云われ、金は後でよい。私が申し込んでおく、と親切な返事。(海図はその後到着したが、保柳先生の本の海図番号が間違っていて別物が来てしまった)

入った処は、倉庫のなかだが、うず高く地図や図書が積まれている、すぐくあるなあ、としかいいようが無い感じだ。人間は我々夫婦と先方二人の四人だけ。奥の小さい部屋に伊能小図が広げてあった。

写真は個人的研究はいくら撮ってもよい。しかし、発表するには許可がいり、お金を納めなければならない。まず、自分の複製図を広げて本物と較べる。良く似てる。本物のほうが緑がほんの少しダークかな、というところ。北海道・西南部もよく似ている。学芸員も良く出来ているな、何処で作ったんだ、勿論日本だ、というような話。奥州

の緑の調子は東京国立博物館の中図に良く似ている。

あと、針穴の確認。家内と二人で丁寧に、拡大鏡で調べたが、針穴はなかった。この図は幕府軍艦方にあったことがはっきりしている図であるが、針穴はない。幕末には幕府内部でも、伊能から提出した図以外に写しを作って使っていたことになる。多難な時期に需要が増え優秀な模写チームができていたのかも知れない。

つぎに熟覧と撮影。個人的研究には開放されているので、良くみて、カメラに納め、ビデオを撮る。全景は大形ポジを持っているので、とらない。部分を専ら写す。現物を近くで見ると、ポジでは余りよく見えなかった西南部彩色は鮮明で、山系の濃緑が細かい。本州中部と北海道は同一人、九州と中国はそれぞれ別人の感じである。

裏打ちには布、折った跡はない。虫食い、傷は殆どない。各図の裏隅に、オールコックに日本政府から送られたもので、測量艦アクテオンとドープ号から納められたとある。海図に引き写すためという鉛筆の方眼がはっきり書いてある。太い軸に巻き、一本毎に段ボール箱に納める。(アクテオンの船首飾りがポーツマスの海軍博物館にあった)

本州中部 縦二六五糎、横一六五糎 寸法は実測

西南部 縦二二二糎、横一六四糎

北海道 縦一六六糎、横一八四糎

海軍水路部からの借用品という。時間が経つのを忘れていたが、コンスタンチニイが来て待っていた。三枚の伊能図の撮影、寸法、針穴チェック、描画の熟覧で一時間はあつという間だった。帰りはテムズの下トンネルを歩いて地下鉄に思ったが、駅まで送ると云うので鉄道で帰った。英語に不自由な我々に皆親切で、積極的に教えてくれた。

(地図は残念だが、無許可なので掲載できない)

太鼓谷稲成神社（津和野）蔵 日本地理測量之図

中国山地の小京都、津和野に伊能図がある。津和野にどうして伊能図があるのか分からなかった。行って見ればわかると思い、神社の篠戸さんをお願いして見せていただいた。九五年十月二十四日、夜遅く津和野に着いて、駅からビジネスホテルに電話したら、満室という。仕方がないので民宿案内所に頼んで民宿をとる。食事はないというので、外に出て一杯やってから、ラーメン屋に入り続きをやっていると、隣の二人組は観光業者らしい。海外旅行の楽屋をしきりに話している。

一人帰ったので話しかける。太鼓谷稲成にある伊能図を見に来たこと、折角きたのにただ一つしかないビジネスホテルにあぶれたこと、交通が不便でどうにもならないこと、などを話していたら、その方は私があぶれたホテルの社長さんだった。

びっくりして、何でホテルの社長がラーメン屋で飲んでいるのか聞いてみた。元々は建設業の事務系統の方だった。会社が地もとの人の依頼でホテルを建てたが代金を貰えないので、経営権を取得し子会社とした。大阪の本社から送り込まれて、単身赴任で社長をやっているとのこと。バブル崩壊がこんな静かな山の中にも及んでいるという話だった。伊能図を求めて歩いていると色々なことに会おうが、忠敬も測量しながら、面白い出会いがあったと思う。

翌朝、高い石段を上がって神社に伺うと、宮司さんのご子息で、権宮司の角河さんが出てきて、伊能図を見せていただく。昨夜、この宮司さんのことも聞いたが、大変経営が上手で、一代の間に神社を大きくされたとのこと。もう一人の神職の方と地下の宝物倉庫から地図を持ち出して三百畳敷きの大広間に運ぶ。

日本全体を描いている日本地理測量之図は五米四方くらいの大形図

だ。二人で両端を持って慎重に広げてゆく。この図は尾張までの、日本の東半分を描いた東三十三国沿海地図の小図とセットで保存されていることが多いがこもそうである。二米四方くらいの沿海地図も広げる。これら二枚の伊能図は堀田仁助の写しである。

広げ終わった頃、宮司さんが現れて、堀田仁助は伊能忠敬の先生という話があるが、といわれる。これには驚いたが、「先生ではなく、先輩というべきだ」とお話ししたら納得された。

津和野藩士堀田仁助は暦数に明るく、寛政五年から暦局に出仕しており、忠敬の寛政十二年蝦夷地測量の前年に、船で蝦夷地測量を試みたから、間違いなく先輩である。ただ、船で移動したため、忠敬のような地図は出来なかった。

忠敬も初めて蝦夷地へ出かけるとき、船でゆくように云われたが、船でゆくと緯度一分の計測ができないので、色々理屈をつけて陸地を選んでいく。その際、堀田仁助の作成した地図もみせられ、これとどう違うのかと問われている。忠敬は、多分先輩を批判せず、上手に申し開きしたと思う。

仁助は、高橋至時以前から暦局にいるから、高橋・伊能とはグループが違うように考えられる。測量日記に一ヶ所あるほかは名前は出て来ない。しかし、同じ暦局にいたのであるから、伊能測量の経過は良く見ていた筈である。神社のお話では、文政十年に帰藩の際、藩主亀井候に土産としてこの二枚の伊能図を持参し、第二次大戦後、太鼓谷稲成神社に寄付されたのこと。

文政十年は、シーボルト事件前年である。暦局は混乱していない。堀田仁助は暦局の原本から写した公算が大きい。藩公への土産である。丁寧に写されている。

それにしても、仁助は藩をあとに暦局に三十年もの長い間いたこと

になる。技術者として故郷を後にし、日本全体のために働いた訳だが、その流れは、同じ津和野出身の森鷗外（もり おうがい）、西周（にし あまね）にも通じているかも知れない。

日本地理測量之図

前置きはそのくらいにして地図の報告に移る。本図は日本全国を縮尺を小図の1/2の八六、四万分の一とした特別小図を中央に配置し、周囲に里程表、島嶼表、湖沼、などの諸表を並べたもの。図二のような美麗な写本である。針穴はない。寸法は縦五一七匁、横五二二匁。

普通の伊能図の測線は朱であるが、本図では黒色。屈折点では左右にヒゲを出す。国の区域毎に橙、紫、ピンク等で色分けする。国名は朱の二重枠内に示す。記号は印を使わずに手書きで、宿駅○、湊△、城下□、など朱書きする。郡界はない。経緯度を記入する。天測した村は☆、測線の通らない村はクロ●印をつける。

全体、周辺諸表は黒の枠で囲む。部分図を図三に示す。

縮尺1/2の沿海地図小図

セットで保管されている特別小図と縮尺を合わせた沿海地図は図四のような図であった。測線は朱、沿海は黄色、山景は著名なもののみを描く、国名、郡名の枠は色付き、国により着色を変える。方位線あり、経緯線はない。

堀田仁助が帰るとき、暦局には最終版伊能図があった筈であるが、何故、中間製品の沿海地図を写したかはよく分からない。この沿海地図は派手であるが、素人っぽい写しである。



図2 太鼓谷稻成神社蔵 日本地理測量之図全景

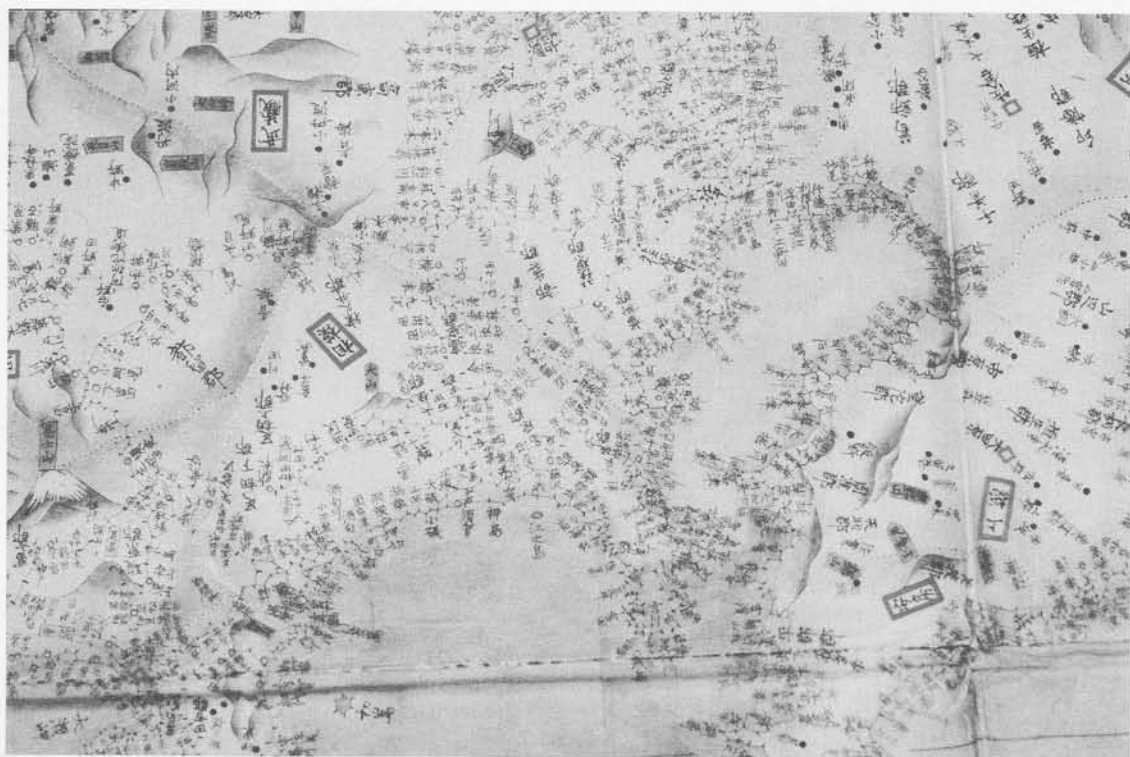


图3 太鼓谷稻成神社蔵 日本地理測量之図（部分）

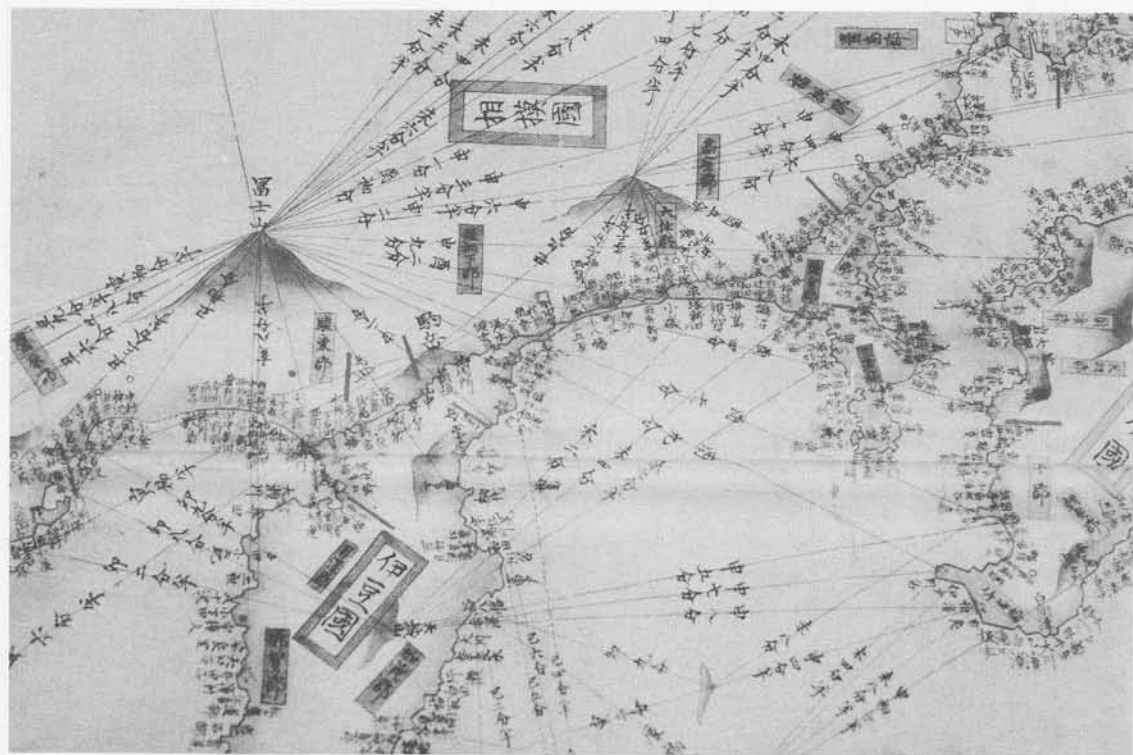


图4 太鼓谷稻成神社蔵 沿海地図特別小図（部分）

トピックス

イタリアにも伊能図があった 渡辺 一郎

つい最近、イタリアにも伊能図があることが分かった。初代イタリア駐日領事(一八六七年着任)のロッベッキーさんが、帰国の際持って帰られた日本地図は現在ロッベッキーコレクションとして、イタリア地理学協会所蔵であるが、甲南大学(神戸市東灘区)の久武哲也教授がその整理を依頼され、昨年十二月に渡伊して調査中に発見された。

その情報が、国際地図学会誌の伊能図特集編集の過程で、北海道大学の羽田野教授から編集委員長である国土地理院地図部長の長岡正利氏に伝わり、筆者に到着したのが、四月十八・九日だった。

早速、羽田野、久武両教授に問い合わせたところ、どうも描図形式が学習院大学附属図書館蔵の伊能中図に似ているように感じた。久武教授はたまたま四月二四日に東京に来る用事があるという。早速、二日は日曜日だったが、学習院女子部教頭(兼学習院女子短大講師)の斎藤先生に電話して訳を話し、久武先生と学習院の伊能図を前に置いて検討をおこなうことを提案した。

予定が詰まっており、時間がギリギリだったが快諾され、その日のうちに附属図書館の課長さんに、当日定刻に地図を出庫するよう依頼して頂いた。というような関係者の連携で、四月二四日、学習院大学附属図書館でイタリアにあった伊能図の検討会をすることができた。出席は、久武先生、斎藤先生と、話を聞いて急遽加わっていただいた立教高校教諭で法政大学講師の清水先生および筆者の四名である。

検討結果を要約する。イタリアにあったのは、伊能中図八枚であるが、これは最終版中図ではなく、文化元年に提出された日本東半部沿海地図中図(五鋪構成)と、文化四年提出の中国畿内中図(二鋪)なら

びに文化六年提出の四国図中図(一鋪)の計八鋪であった。最大の特徴は地名、郡名、国名をすべてカタカナで記入していることである。カナ書きの伊能図としては、高橋景保がシーボルトに与え、のち幕府が取り戻したというカナ書き特別小国(国立国会図書館古典籍室蔵)が有名である。筆者は他に作成目的不明なカナの特別小国が静嘉堂文庫にもあることを知っているが、イタリアのカナ書き伊能図は三番目のものでこれまでは知られていなかった。他のカナ書き伊能図は、国名、郡名は漢字であるが、この図は国名、郡名も枠のなかにカナで記入する点も変わっている。

久武教授の持参した部分写真と学習院中図を突き合わせたが、描図がやや簡単なこと以外は学習院中図と一致した。記憶の範囲では、各図の構成も同じとのことであった。凡例の記録(凡例はカナと漢字)も書き込む場所は違っているが、内容は一致した。沿海地図中図は普通は三鋪構成であるが、学習院のものは五鋪構成で、イタリア中図は学習院中図の様式を踏襲した写しであった。中国・畿内・四国図は国内にある該当図と特に変わっているところはない。

あとは推理である。カナの伊能図は日本人には要らないから、此の図が前からあったとは思えない。ロッベッキー氏の希望で作られたものであろう。相当なボリュームのものをよく写したとおもう。他にも国内に、幕末に作られたと思われる優秀な写本があるところを見ると、当時伊能図の需要に応えるため、優秀な写図チームが存在したような気がしている。またどうせ写すなら、最終版伊能図を写したら(当時は存在した)とおもうが、最終版を借り出す手がかりが無かったのだろうか。なお久武先生によると、関西の地名の読み違いが多いという。例えば枚方をマイカタとよんでいる。模写した者は関東の人ではないかとのことである。

(わたなべ いちろう)

伊能忠敬記念公園と銅像除幕式

新沢 義博

一九九六年二月一日日曜日、天候快晴。北風が真冬日を象徴していた。

この日はご存じの忠敬、満二五歳の誕生日である。出生地九十九里町では、町制四〇年を記念してかねてから整備していた「伊能忠敬記念公園竣工ならびに銅像除幕式」が盛大に行われ、日本の建国と九十九里町が生んだ郷土の先覚者を称える祝日となった。

地理学的に著名な九十九里海岸の納屋集落に対して内陸部に位置する生誕地の小関は、「岡集落」といわれる農業集落を形成している。

その地で一七四五（延享二）年小関家の末っ子として出生した忠敬（幼名三治郎）は六歳の時母と死別、養子に來た父理右衛門と共に小関を去り、父の実家である小堤村（現在の横芝町小堤）に帰っていった。



その後一七歳の時、佐原村伊能家の婿養子となったことはよく知られている。

忠敬を育んだまち佐原には、記念館や銅像、数々のモニュメントがある。それに対し生誕地の九十九里町には、昭和十一年に建立された『伊能忠敬先生出生之地』の石碑のみであった。

町は町制四〇年記念事業として、忠敬の偉大な業績を町民はもとより全国的にアピールするため銅像の建設と出世地周辺の整備が平成六年七月から開始された。

敷地面積一六〇〇平方メートルの公園中央に太平洋、九十九里浜をイメージした芝生広場を配置し、周辺に町の木クロマツなどを植栽するほかトイレ、駐車場を完備している。

銅像は測量器具「象限儀」を備え天空を仰いでいる姿で、東金市出身で日展会員の上野弘道氏によって制作された。ちなみに佐原にある銅像は大正八年に設置。羅針盤を備え測量姿で街を望んでいる。像高約三、三メートル。九十九里のは、約一、六メートルと等身大に近い。

除幕式中、伊能家謝辞として昨年他界された七代当主敬氏のご夫人昌子さんが挨拶された。その中で昌子さんは「全国測量中、いつも心の中にはすばらしい九十九里町のおもかげを抱かっていたのではないだろうか。遺品やお墓は他の地にあっても、心は永遠にこの九十九里に還られているのではないだろうか。」と話された。

忠敬の心の故郷九十九里町を訪れば、あの頃と変わらぬ砂丘を歩く少年伊能忠敬と出会えるかも知れない。

（しんざわ よしひろ 立正大学文学部地理学科）

幕引くや春光を指す忠敬像

洋

伊能忠敬研究会入会案内

一、本会は、つぎのような活動をおこないます。

(一) 会報の発行(当面、年四回)

『季刊 伊能忠敬研究 史料と伊能図 「伊能図探究」継承』
各号三六頁。伊能図探究を継承するので、初号は第七号からとなります。

(二) 年次大会・例会の開催

年一回の年次大会と例会を開催します。一般講演、各種の発表のほか史料、伊能図の展示説明等を併催します。

(三) その他付帯する事業。

二、入会方法、会費等

(一) 入会申込は、住所、氏名、職業、専門、電話番号、FAX番号などを書いた申込書を左記にお送りいただくとともに、小為替または銀行送金等で年会費六千円を御送金下さい。

(二) 申込先 〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の五〇四
飯田橋ハイタウン五〇四

伊能忠敬研究会(事務局 渡辺一郎)

(三) 送金先 東海銀行飯田橋支店 普通一〇八七五四八

伊能忠敬研究会(イノウタダタカケンキユウカイ)あて

投稿規定

一、会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお任せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

二、一頁は、二段組三十一字×二六行×二段で一六二二字、三段組二〇

字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこれの中に含まれます。分量を御考慮願います。

三、原稿はワープロ入力したテキストタイプのコピーを歓迎します。その際、必ず出力したプリントを添付願います。また、提出した原稿は必ず控えをおとり下さい。返却は致しかねます。本誌の編集委員はつぎの各氏にお願いしております。

四、安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禧良(前佐原市教育委員会教育次長)・小島一仁(佐原市史編集委員長)・斉藤 仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭、法政大学講師)・芳賀 啓(柏書房取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図探究会代表、社会会長)(五十音順)

編集後記

●新発足二号が皆さんのご協力でまとまりました。忠敬研究の大先輩の小島先生から忠敬の妻ミチの書簡解説を頂き、豊田市の郷土資料館からは未公開の鈴村家文書を紹介させて頂きました。有り難うございました。

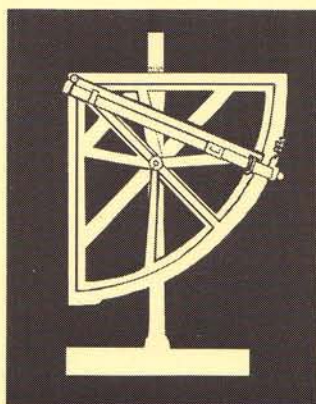
●毎年六月三日は「測量の日」で、建設省国土地理院では、平成元年から「測量・地図に関する普及・啓発に功労のあった」人々を対象に、この日「『測量の日』功労者表彰式」が行われています。初回は作家の井上ひさし氏で、「四千万歩の男」で伊能忠敬を再び世に知らしめたことが認められたものです。本年度の功労者は、本会事務局長の渡辺一郎氏。「全国に散在する『伊能図』の来歴とその内容に関する調査」が表彰されました。さて、次の受賞者は?

(芳)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.8 Summer 1996



ESSAY

- My Encounter with Ino Tadataka StudentSAITO Hitoshi 1

INTRODUCTIVE NOTES

- Two gravesINO Hiroshi 3
Ino Tadataka's StrideEDITORIAL Staff 3

MATERIALS

- Letter From Ino Tadataka's WifeKOJIMA Kazuhito 4
Family Document

- SAKABE Teibei , an Early SurveyorANDO Yukiko 8
The Sentence of The Siebold CaseINO Yoko 13

Regional Materials

- Recode of Suzumura Family , Syouya at KOROMOEDITORIAL Staff 16
Note of Recode at ToyotaITO Eiko 20

INO'S Land Survey Diary

- The Sixth Survey Diary (2)SAKUMA Tatsuo 21

THE SEARCH FOR INO'S MAPSWATANABE Ichiro 26

- Viewing The Ino's Maps at National Maritime Museum, Greenwich LONDON26
The Maps of Japan Owned by TAIKODANI Shrine at TSUWANO28

TOPICS

- A INO TADATAKA'S Maps in ITALYWATANABE Ichiro 31
Detation Celemony for Park and StatueSHINZAWA Yoshihiro 32

OTHER NEWS33

Edited and Published

by

THE INO TADATAKA SOCIETY